

# 原遺跡第3次調査概要報告書



## 例　　言

- 1 本書は、宮城県岩沼市南長谷字上原ほかに所在する原遺跡の第3次調査概要報告書である。
- 2 本調査は原遺跡の内容確認のために実施したものである。
- 3 現地調査は、岩沼市教育委員会生涯学習課が平成30年（2018）5月10日～12月31日にかけて実施した。調査面積は859m<sup>2</sup>である。
- 4 調査に際しては農事組合法人原生産組合・寒風澤菊男氏及び近隣住民の方々からご理解・ご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。
- 5 整理・報告書作成は平成30年12月1日～平成31年（2019）2月2日にかけて、岩沼市文化財整理室にて行った。
- 6 本書の遺構番号は、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。  
SA：材木堆跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑  
SX：性格不明遺構 P：柱穴跡
- 7 現地調査、及び本書の執筆・編集は、生涯学習課文化財係 川又隆央・武田裕光・永井三郎・太田昭夫が担当した。なお、執筆分担は以下のとおりである。  
川又隆央…第Ⅰ章、第Ⅳ章　武田裕光…第Ⅱ章  
永井三郎…第Ⅲ章1・2（遺構）　太田昭夫…第Ⅲ章2（遺物）
- 8 発掘調査、及び整理に際し、次の諸氏・機関よりご協力・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）。  
相沢 清利、安達 訓仁、阿部 明彦、猪狩 みち子、生田 和宏、石橋 宏、石本 弘、植松 晓彦、恵美 昌之、大泉 正一、大橋 泰夫、利部 修、金森 安孝、熊谷 篤、熊谷 満、黒田 智章、桑原 滋郎、小松 政夫、斎藤 和機、斎野 裕彦、佐久間 光平、佐藤 秀一、佐藤 俊、佐藤 敏幸、白崎 恵介、白鳥 良一、真保 昌弘、菅原 淳夫、鈴木 啓司、鈴木 敏則、鈴木 朋子、高橋 栄一、高橋 透、千葉 宗久、徳竹 亜希子、長島 栄一、永田 英明、西村 力、丹羽 茂、早川 麗司、平塚 幸人、藤木 海、藤沼 邦彦、藤原 二郎、古川 一明、堀 裕、村上 裕次、村田 晃一、山田 晃弘、山中 敏史、吉井 宏、吉野 武  
多賀城跡調査研究所、宮城県教育委員会文化財課
- 9 本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は次のとおりである。
  - (1) 遺構の用語、及び略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。
  - (2) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
  - (3) 縮尺は図に示すとおりである。
  - (4) 土層、及び土器の色調は「新版標準土色帳」（小川・竹原 1973）による。
- 10 第3次調査の成果については、平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会、第45回古代城柵官衙検討会等で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。
- 11 発掘調査の記録類、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

## 目 次

### 例 言

### 調査要項

<b>第Ⅰ章</b>	<b>調査に至る経緯・経過と調査方法</b>	1
1.	調査に至る経緯と経過	1
2.	調査方法	1
<b>第Ⅱ章</b>	<b>遺跡の位置と環境</b>	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	4
<b>第Ⅲ章</b>	<b>調査成果</b>	7
1.	基本層序	7
2.	発見した遺構と遺物	8
a.	堅穴建物跡	10
b.	掘立柱建物跡	36
c.	材木廻跡	46
d.	溝跡	46
e.	小溝状遺構群	54
f.	土坑	54
g.	性格不明遺構	54
h.	その他の出土遺物	58
<b>第Ⅳ章</b>	<b>総括</b>	61
1.	遺構の変遷と時期について	61
2.	まとめ	64
	引用参考文献	65
<b>写真図版</b>		67

## 挿 図 目 次

第1図	第3次調査グリッド図	2	第34図	SI29出土遺物	32
第2図	岩沼市域の地形分類	3	第35図	SI30出土遺物	32
第3図	岩沼市域の遺跡分布図	6	第36図	SI34	33
第4図	基本層序模式図	7	第37図	SI34出土遺物	34
第5図	第1次調査と第3次調査の調査区全体図	8	第38図	SI36	34
第6図	調査区全体図	9	第39図	SI36出土遺物	35
第7図	SI01	10	第40図	その他の堅穴建物跡出土遺物	35
第8図	SI01出土遺物	10	第41図	SB01・02 1	37
第9図	SI03	12	第42図	SB01・02 2	39
第10図	SI03出土遺物1	13	第43図	SB01・02 3	40
第11図	SI03出土遺物2	14	第44図	SB01出土遺物	41
第12図	SI03出土遺物3	15	第45図	SB03	42
第13図	SI05	16	第46図	SB04	43
第14図	SI05出土遺物	16	第47図	SB05	44
第15図	SI11	17	第48図	SB06・SB07・SB08	45
第16図	SI11出土遺物1	18	第49図	SA01・SD11 1	47
第17図	SI11出土遺物2	19	第50図	SA01・SD11 2	49
第18図	SI11出土遺物3	20	第51図	SD11出土遺物	49
第19図	SI12・SI13・SI22・SI23・SI24・SI31・SI32・ SI33・SI37	22	第52図	溝跡 1	51
第20図	SI13出土遺物	23	第53図	溝跡 2	52
第21図	SI22出土遺物	23	第54図	溝跡出土遺物	53
第22図	SI23出土遺物	23	第55図	小溝状遺構群1	55
第23図	SI24出土遺物	24	第56図	小溝状遺構群2	56
第24図	SI31出土遺物	24	第57図	小溝状遺構群出土遺物	56
第25図	SI32出土遺物	24	第58図	SK04	56
第26図	SI37出土遺物	24	第59図	SK04出土遺物	57
第27図	SI27 1	26	第60図	SX02	57
第28図	SI27 2	27	第61図	SX02出土遺物	57
第29図	SI27出土遺物1	28	第62図	その他の出土遺物1	59
第30図	SI27出土遺物2	29	第63図	その他の出土遺物2	60
第31図	SI28	30	第64図	第3次調査主要遺構相関図	61
第32図	SI28出土遺物	30	第65図	I期の主要遺構群	62
第33図	SI29・SI30・SI35	31	第66図	II期の主要遺構群	62
			第67図	III期の主要遺構群	63

## 表 目 次

第1表	岩沼市域の遺跡一覧表	6	第5表	溝跡属性表	53
第2表	堅穴建物跡属性表	36	第6表	小溝状遺構群属性表	56
第3表	掘立柱建物跡属性表	46	第7表	土坑属性表	58
第4表	材木堆跡属性表	49			

## 写真図版目次

写真図版1	第3次調査全景
写真図版2	遺跡上空から阿武隈川上流を望む（東から） 遺跡上空から千貫山を望む（南東から）
写真図版3	遺跡上空から阿武隈川と亘理郡を望む（北から） 遺跡上空から阿武隈川下流を望む（西から）
写真図版4	遺跡上空から岩沼市街地を望む（南西から） 阿武隈川南岸より原遺跡を望む（南西から）
写真図版5	第1～3次調査区全体（南から） SD11 土層断面 北（南東から）
写真図版6	SB01・02（北西から） SB03（北から）
写真図版7	SB05（北から） SB01 P107（東から） SB01 P238（南から） SB03 P195（東から） SB05 P178（東から）
写真図版8	SI11（南から） SI03（南から） SI03 カマド遺物（第10図4）出土状況（南から） SI27（南から） SI27 カマド（南から） SI29 カマド遺物（第34図1）出土状況（南から） SI36（北西から） SI36 カマド（西から）
写真図版9	1 SI01 土師器壺（第8図1） 2 SI03 土師器壺（第10図2） 3 SI03 土師器手づくね土器（第10図3） 4 SI03 土師器蓋（第10図4） 5 SI03 土師器蓋（第10図4） 6 SI03 土師器蓋（第10図5） 7 SI03 土師器蓋（第10図5） 8 SI03 土師器甕（第11図1）

- 写真図版 10 1 SI03 土師器甕 (第 11 図2)  
2 SI03 土師器甕 (第 11 図4)  
3 SI03 土師器甕 (第 11 図5)  
4 SI03 土師器甕 (第 12 図1)
- 写真図版 11 1 SI05 刀子 (第 14 図1)  
2 SI11 土師器坏 (第 16 図2)  
3 SI11 土師器坏 (第 16 図3)  
4 SI11 土師器坏 (第 16 図4)
- 写真図版 12 1 SI11 土師器甕 (第 16 図11)  
2 SI11 土師器甕 (第 16 図12)  
3 SI11 須恵器坏 (第 17 図1)  
4 SI11 須恵器坏 (第 17 図2)
- 写真図版 13 1 SD11 須恵器坏 (第 17 図7)  
2 SI11 須恵器坏 (第 17 図8)  
3 SI11 須恵器坏 (第 17 図9)  
4 SI11 須恵器短頸甕 (第 17 図11)
- 写真図版 14 1 SI11 鉄滓の付着した炉壁  
2 SI11 鉄滓の付着した炉壁  
3 SI22 須恵器坏 (第 21 図1)  
4 SI23 土師器坏 (第 22 図1)
- 写真図版 15 1 SI27 土師器甕 (第 29 図5)  
2 SI27 土師器甕 (第 29 図6)  
3 SI27 土師器甕把手 (第 29 図7)  
4 SI27 須恵器坏 (第 29 図9)
- 写真図版 16 1 SI27 須恵器坏 (第 30 図2)  
2 SI27 須恵器甕 (第 30 図3)  
3 SI28 土師器高坏 (第 32 図1)  
4 SI29 土師器坏 (第 34 図1)
- 写真図版 17 1 SI34 土師器坏 (第 37 図2)  
2 SI36 土師器甕 (第 39 図1)  
3 SI36 壁土1  
4 SI36 壁土1
- 写真図版 18 1 SI08 砕石 (第 40 図3)  
2 SI09 鉄製品 (第 40 図4)  
3 SD06 須恵器甕 (第 54 図2)  
4 SD06 羽口 (第 54 図3)
- 5 SI03 土師器甕 (第 12 図2)  
6 SI03 磨石 (第 12 図3)  
7 SI03 磨石 (第 12 図3)  
8 SI03 磨石 (第 12 図3)
- 5 SI11 土師器坏 (第 16 図5)  
6 SI11 土師器坏 (第 16 図7)  
7 SI11 土師器甕 (第 16 図9)  
8 SI11 土師器甕 (第 16 図10)
- 5 SI11 須恵器坏 (第 17 図3)  
6 SI11 須恵器坏 (第 17 図4)  
7 SI11 須恵器坏 (第 17 図5)  
8 SI11 須恵器坏 (第 17 図6)
- 5 SI11 須恵器長頸甕 (第 17 図 12)  
6 SI11 須恵器瓶類 (第 17 図 13)  
7 SI11 羽口 (第 18 図1)  
8 SI11 回石・磨石 (第 18 図2)
- 5 SI23 須恵器坏 (第 22 図3)  
6 SI24 土師器坏 (第 23 図1)  
7 SI27 土師器坏 (第 29 図1)  
8 SI27 土師器鉢 (第 29 図2)
- 5 SI27 須恵器坏 (第 29 図 10)  
6 SI27 須恵器坏 (第 29 図 11)  
7 SI27 須恵器坏 (第 29 図 12)  
8 SI27 須恵器坏 (第 30 図1)
- 5 SI29 支脚 (第 34 図2)  
6 SI30 須恵器坏 (第 35 図1)  
7 SI31 土師器甕 (第 24 図1)  
8 SI32 土師器鉢 (第 25 図1)
- 5 SI36 壁土2  
6 SI36 壁土2  
7 SI37 土師器坏 (第 26 図3)  
8 SI12 土師器甕 (第 40 図2)
- 5 SD14 回石・磨石 (第 54 図4)  
6 SD14 回石・磨石 (第 54 図4)  
7 SD06 鈎針 (第 54 図2)  
8 SK04 土師器坏 (第 59 図1)

- 写真図版 19 1 SK04 土師器鉢（第 59 図3）  
2 その他 土師器壺（第 62 図1）  
3 その他 土師器壺（第 62 図3）  
4 その他 土師器壺（第 62 図4）  
写真図版 20 1 その他 須恵器壺（第 63 図3）  
2 その他 須恵器壺（第 63 図7）  
3 その他 弥生土器（第 63 図8）  
4 その他 弥生土器（第 63 図9）  
5 その他 土師器高壺（第 62 図6）  
6 その他 土師器高壺（第 62 図8）  
7 その他 須恵器壺（第 63 図1）  
8 その他 須恵器壺（第 63 図2）  
5 その他 弥生土器（第 63 図10）  
6 その他 弥生土器（第 63 図11）

### 調査要項

所 在 地 岩沼市南長谷字上原ほか

調査原因 内容確認調査

調査主体 岩沼市教育委員会

調査期間：平成 30 年 5 月 10 日～平成 30 年 12 月 31 日

調査面積：859 m<sup>2</sup>

調査担当：川又 隆央、武田 裕光、永井 三郎、太田 昭夫

現場調査参加者：塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤トシ子、佐藤 光善、南城 美代子、

渡辺 幹雄

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯・経過と調査方法

### 1. 調査に至る経緯と経過

原遺跡の発掘調査は、平成 28 年度の圃場整備事業に伴う第1次調査において、古墳時代中期から平安時代にかけての遺構・遺物が多数発見されたことに端を発する。この調査は排水路敷設に伴う調査のために調査区幅は約2mと狭いながら、一辺が1mほどで方形の掘方を有する柱穴群や、須恵器円面鏡が発見されたことから、これまで場所の特定が困難であった「玉前駅家」、あるいは「玉前割（閔）」に関する遺跡である可能性が浮上した。この成果を受けて岩沼市では、遺構・遺物の広がりをさらに把握することを目的として、柱穴群が確認された地点の西側水田において平成 29 年度に第2次調査を実施し、柱穴や堅穴建物を中心とする遺構群が西側へ確実に展開していることを明らかにした。しかしながら、第2次調査は調査目的を範囲確認に主眼を置いたことからトレンチによる調査手法を選択しており、発見した個々の遺構が時期別にどのような空間を形成していたのか、という点では不明な点が多く残った。

国庫補助事業1年目となる今年度の調査も、当初は第2次調査と同様に遺構範囲の把握を目的とした調査を計画していた。ところが第2次調査終了後である平成 30 年 1 月に、第2次調査を実施した水田において暗渠排水工事を行う予定がある、との情報が仙台地方振興事務所、名取土地改良区などから寄せられた。この工事が実施された場合、平面的な遺構の確認は非常に困難となることが予想されたことから、岩沼市では当初の調査計画を大幅に変更し、第2次調査区を拡大するかたちで第3次調査を実施することへの検討に入り、調査地となる水田の休耕補償を含めた土地賃借について農事組合法人 原生産組合と協議を重ねた。その後、平成 30 年 2 月に組合側からの了承が得られたことを受け、平成 30 年 4 月 1 日付で「土地賃借契約」を締結し、調査機材の準備を行った。

現地調査は平成 30 年 5 月 10 日より着手した。重機による表土掘削が終了した 5 月 22 日から人力で精査を開始し、遺構の検出に努めたほか、測量杭の設置等を行っている。調査は他の業務との兼ね合いから 8 月 1 日から 9 月 17 日にかけて一時中断したが、再開後は掘立柱建物を中心とした遺構の重複関係の把握に重点を置き、調査成果が概ねまとまった 10 月 24 日に報道機関へ向けた現地説明会を開催した。また 10 月 27・28 日の二日にわたり、地域住民及び一般市民を対象とした現地公開を行った。その後、遺構図面の作成などの作業を実施し、11 月 30 日に機材等を搬出、重機による埋め戻しを 12 月 31 日にかけて実施した。なお、調査では隨時デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行っているが、ドローンを用いた空撮も 5 回実施している。

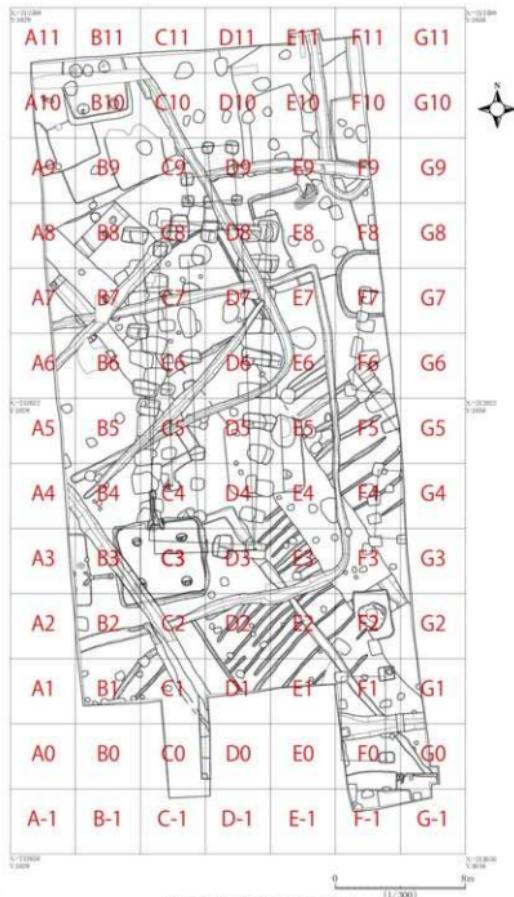
調査中には宮城県教育庁文化財課、多賀城跡調査研究所などをはじめとする多数の方々が来跡し、様々な助言をいただいた。なお、原遺跡の今後の調査計画・調査方針を審議・承認するための「原遺跡調査検討委員会」を 11 月 1 日付で設置し、11 月 20 日に委員会の開催と現地視察を実施した。

### 2. 調査方法

第3次調査の目的は、第2次調査で明らかにできなかった遺構群の平面的な確認を第一に掲げ、併せて各遺構の機能時期を可能な限り把握することとした。このため、各遺構の掘り下げは遺構保存の観点から他の遺構との重複関係を明確に把握する必要が生じた SI27 や SD01 ~ 03・05 ~ 07・13・14・18 を除く、限定した範囲で実施している。

調査はまず<sup>6</sup>、重機を用いて基本土層IV、あるいはV - ①層上面までを掘削し、その後に遺構確認面としているⅦ - ①層までを人力で掘り下げ、精査を実施した。確認した遺構のうち、柱穴については一段下げを実施して柱痕跡の有無を確認したほか、部分的に断ち割りを行っている。竪穴建物についてはSD11とSB01・02の年代の把握を目的としてSI01・03・27・28・34で掘り下げを実施したほか、SI05・11・23・24・29・30・35・36・37などの一部を調査している。このほかSA01では柱痕跡が認められる深さまで全体を掘り下げ、北側列・南側列の一部では掘方形状を確認するために完掘している。SD11は他の遺構との重複が著しいが、北側と南側の一部にトレーナーを設定し、掘方形状と堆積状況の把握を行っている。なお、竪穴建物跡の調査は、住居内部を四分割して掘り下げ、それぞれ北東部をAとし、時計回りにB～Dと名称を付けており、遺物の取り上げでもこの呼称を使用している。

遺構の平面測量に際しては、第1・2次調査成果との整合性をはかるために岩沼市が設置した2級



第1図 第3次調査グリッド図

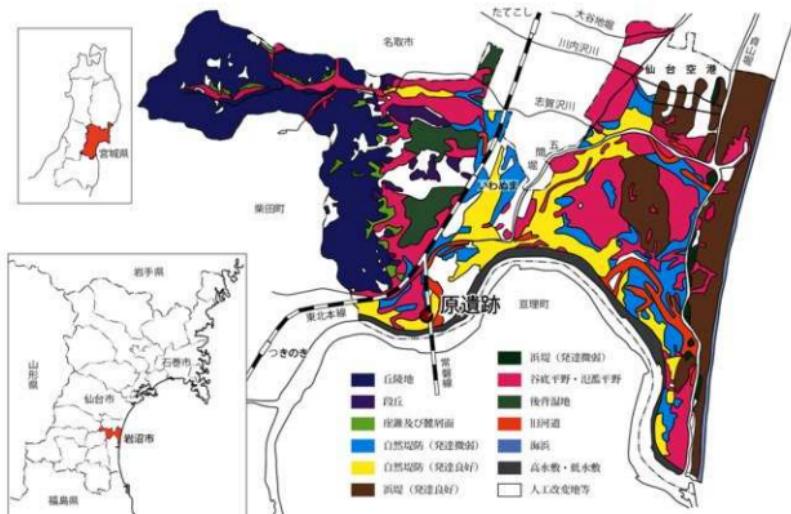
基準点、及び圃場整備事業の際に設置された3級基準点を使用した。使用した基準点それぞれの名称・座標数値は、岩沼市2級基準点(2-066)がX:-212501.506・Y:1615.862、圃場整備事業3級基準点(H-27-3-04)がX:-212659.005・Y:1627.007である。岩沼市設置の基準点数値については、国土地理院がweb上で公開している「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」による地盤変動を補正するバラメーターファイルを用いて補正を行った数値である。なお、調査区南西隅であるX:-212642.000 Y:1632.000の交点をA0杭とし、4mごとにグリッドライン名を附した。また精査時などの遺物の取り上げの際に使用した各グリッドの名称は、北東隅の交点名を採用している。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋に臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400 km<sup>2</sup>を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の分岐・合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西侧の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋まで7～8kmの幅をもつ。この沖積平野は阿武隈川をはじめ、志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、自然堤防が発達する。また、浜堤の発達も顕著であり、市域では大きく分けて岩沼市街地の第Ⅰ浜堤列、玉浦地区の第Ⅱ浜堤列、海岸地区の第Ⅲ浜堤列が確認できる。本報告対象となる原遺跡は、阿武隈川北岸から200～300m北に位置し、阿武隈川北岸に形成された自然堤防上に立地している（岩沼市史編纂委員会2018b）。



第2図 岩沼市域の地形分類

## 2. 歴史的環境

岩沼市域では、これまでに縄文時代から近代にかけての遺跡が 67 箇所で確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、平成 23 年（2011）から平成 26 年（2014）にかけて行われた岩沼市史編纂事業に伴う学術調査により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下に各時代の概略を記す。

### 縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晚期の遺物が多量に発見された下塩ノ入遺跡【15】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとまって分布している。また、沖積地を望む丘陵上に立地する山畠南貝塚【10】や畠堤上貝塚【33】では、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とした貝層の形成もみられる。北原遺跡【8】では、中期後葉の土坑が 50 基近く検出され、磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された。鶴ヶ崎城跡【23】では、第4地点の発掘調査において、鶴ヶ島台式や梨木畳式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市教育委員会 2005、岩沼市史編纂委員会 2015）。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡は縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら上根崎遺跡【29】や朝日古墳群【34】、平野部に位置するかめ塚西遺跡【3】でも土器の散布が認められ、人間の営みが太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。鶴ヶ崎城跡【23】では、中期後葉と考えられる堅穴建物跡や十三塚式に比定される土器および石包丁などの石器が発見されている。北原遺跡【8】では、北関東を中心に分布する十王台式に並行するものとみられる、後期後半と推量される土器が見つかっている。また、杉の内遺跡【7】では初痕のある土器も採集されている。（岩沼市教育委員会 2005、岩沼市史編纂委員会 2015）。

### 古墳時代

古墳時代の遺跡は高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【2】では、古墳周溝の発掘調査において土師器や須恵器のほか、底面から一本二又鋏が出土した。また、地表に顕在する全長約 39 m の墳丘は、周囲が後世に削られたものであり、本来は全長約 48 m を測る前方後円墳であったことが推定されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代や古墳の立地条件、墳丘の形態などの点から前期にさかのぼる可能性が示されている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

横穴墓は岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面で多く造られ、これまでに 10 箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【11】、丸山【4】、二木【9】、土ヶ崎【22】、引込【30】などの横穴墓群の発掘調査では、7世紀前半頃から造営が開始され、8世紀前半頃まで機能していたと考えられている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

集落遺跡では北原遺跡【8】をはじめとする長岡丘陵遺跡群が前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約 500m の位置に所在する熊野遺跡【16】でも、同時期の堅穴建物跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【13】では前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らか

となった。中期以降の様相については遺物の発見が少なく判然としないが、下野郷館跡【37】では南小泉式の土師器壺が出土し、第Ⅱ浜堤列上でも将来、古墳時代の集落遺跡の発見が期待される（岩沼市教育委員会 2018b、岩沼市史編纂委員会 2015）。

## 古代

岩藏寺遺跡【36】の所在する岩藏寺には、平安時代後期に製作されたと考えられる木造如来像が現存する。発掘調査では、小石を塚状に集積した遺構の底面で火を焚いた痕跡と須恵系土器の壺が発見されており、平安時代から何らかの祭祀行為を行っていた可能性が考えられている（岩沼市史編纂委員会 2018a）。北原遺跡【8】や熊野遺跡【16】では、7世紀末から10世紀前半にかけての堅穴建物跡が発見されている（岩沼市教育委員会 2015）。原遺跡【1】では、昨年度までの発掘調査で堅穴建物跡や材木崩跡、方形の柱穴跡などが検出され、円面鏡や墨書き土器、刀の口金具が出土した（岩沼市教育委員会 2018a）。近接する南玉崎遺跡【46】や樋遺跡【60】では、土師器・須恵器などが出土しており、このうち樋遺跡では7世紀末～8世紀初頭頃に位置付けられる須恵器の高台壺などが出土している（岩沼市史編纂委員会 2015）。対岸（阿武隈川南岸）には、平安時代の陸奥国日理郡衙跡と考えられている十三三間堂官衙遺跡（亘理町）が位置し、中世には逢隈湊と呼ばれる湊の存在が『吾妻鑑』に記されている。

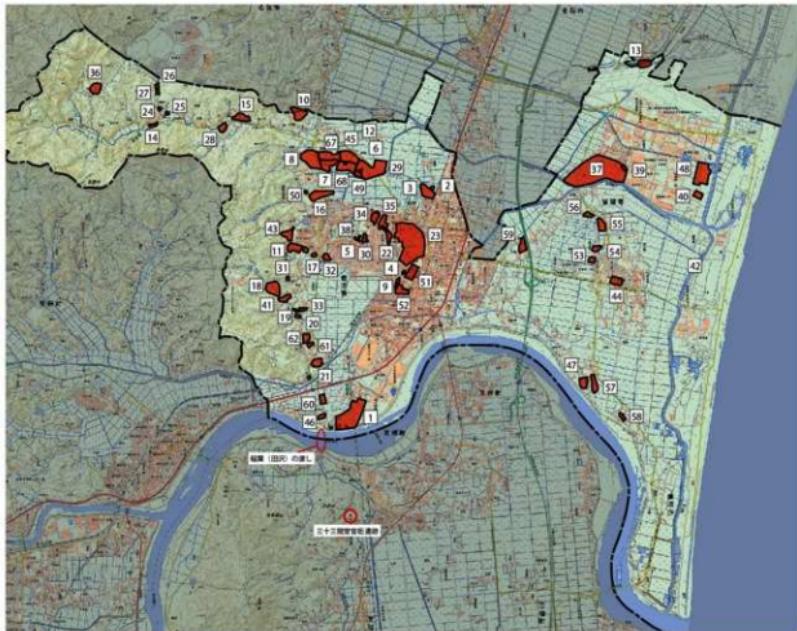
## 中世

中世の遺跡は、過去に朝日古墳群【34】、朝日遺跡【35】、鶴ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【51】、竹駒神社境内遺跡【52】、下野郷館跡【37】、西須賀原遺跡【47】、中ノ原遺跡【50】、岩藏寺遺跡【36】、刈原遺跡【57】、上根崎遺跡【29】などで発掘調査が行われている。平成27年（2015）の熊野遺跡【16】の発掘調査において長軸3.9m、短軸2.4mを測る方形堅穴遺構が確認された。これは倉庫的な性格を持つ遺構と推定されるが、底面からは龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗片が出土していることから当該地周辺の中ノ原遺跡【50】で発見された板碑を伴う蔵骨器に納められた被葬者と関わりを持つ在地富裕層などが存在した可能性がある（岩沼市教育委員会 2015、岩沼市史編纂委員会 2015・2018a）。

## 近世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて多い傾向にある。丸山遺跡【51】、竹駒神社境内遺跡【52】、下野郷館跡【37】、西須賀原遺跡【47】、西土手遺跡【55】、新筒下遺跡【53】、刈原遺跡【57】、高原遺跡【58】などで発掘調査が行われ、仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。鶴ヶ崎城跡【23】第1地点の調査では、溝跡や石積み遺構、碗埋納遺構などが検出され、第4地点では土壘の補・改修痕跡が確認された。遺物では、15世紀前半頃の龍泉窯系青磁盤や天目釉を施した瀬戸産小壺などが出土した（岩沼市教育委員会 2005、岩沼市史編纂委員会 2015）。

本市南長谷玉崎地区には、歌枕としても知られる「稻葉（田沢）の渡し」があり、市域では最も古くからある渡し場であったと考えられている。また、江戸時代には鰐肝入渡港家が、船からの税徵収や米などの商品継送を手掛け、阿武隈川舟運を統制した。原遺跡【1】の所在するこの地は、古くから水陸交通の要衝であったことがわかる（岩沼市史編纂委員会 2012、2018a）。



第3図 岩沼市域の遺跡分布図

第1表 岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	原遺跡	古墳・古代	23	綾ヶ崎城跡	國文・弥生・中世・近世	45	長坂北遺跡	國文・古墳・古代
2	かみ塙古墳	古墳	24	八森A遺跡	國文	46	南玉崎遺跡	國文・古代
3	かみ塙西遺跡	弥生・古墳	25	八森B遺跡	國文	47	西須賀原遺跡	古代
4	丸山横穴墓群	古墳	26	綾谷A遺跡	國文・近世	48	高大原遺跡	古墳・古代
5	白山横穴墓群	古墳	27	綾谷B遺跡	國文・近世	49	長徳寺前遺跡	近世
6	新野塙古墳	古墳	28	新宮下遺跡	國文	50	中ノ原遺跡	中世
7	移の内遺跡	弥生・古墳・古代	29	上相崎遺跡	國文・弥生・古代・中世	51	丸山遺跡	中世・近世
8	東原遺跡	國文・弥生・古墳・古代	30	引込塙7号墳	古墳	52	竹駒神社境内遺跡	中世・近世
9	二木横穴墓群	古墳	31	古瀬山遺跡	弥生・古墳	53	新間下遺跡	古代
10	山惣南貝塚	國文・古代	32	新田遺跡	國文・古代	54	浜前遺跡	古代
11	長谷寺横穴墓群	古墳	33	綾堤上日塚	國文・古墳・古代	55	西土手遺跡	中世
12	山岸古墳	古墳	34	綾日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	56	前桜遺跡	古代
13	孫兵衛谷地遺跡	古墳前	35	朝日遺跡	古墳・古代・中世	57	利原遺跡	古代
14	大口遺跡	國文	36	笠置寺遺跡	國文・古代・中世	58	高原遺跡	中世
15	下電ノ入遺跡	國文	37	下野郷御跡	古墳・古代・中世・近世	59	上中筋遺跡	古代・中世
16	熊野遺跡	古墳・古代	38	白山塙	近世?	60	穂遺跡	古代・中世
17	平野山横穴墓群	古墳	39	原外遺跡	古代	61	明遺跡	古墳・古代
18	新創跡	中世	40	にら塙遺跡	古墳・古代	62	台遺跡	國文・弥生
19	綾堤上横穴墓群	古墳	41	新館前遺跡	國文・古代	63	長坂遺跡	國文・古墳
20	稻荷京遺跡	弥生・近世	42	白山塙(曳曳屋)	近世	64	上小間遺跡	弥生・古墳・古代
21	長谷小畠跡	室町	43	竹倉部遺跡	弥生・古墳・古代			
22	土ヶ崎横穴墓群	古墳	44	新田東遺跡	奈良・中世・近世			

## 第III章 調査成果

### 1. 基本層序（第4図）

調査地点の基本層序については、第2次調査概要報告書で各調査区の柱状図を示し詳細を述べた。本報告書では統括的な柱状図を示し概要を示す。

調査区一帯は平成28年度の圃場整備事業により改変を受けている。調査区の現況は水田で、標高4.80mである。阿武隈川に近い南側の水田は一段高く、また西側の水田および畠も標高が高くなっている。I層はオリーブ褐色シルト層で水田耕作土である。II層は褐色シルト層である。III層は黒褐色～暗褐色～灰黄褐色を呈するシルト層であるが、この層は古代の遺物を多く含み調査区全域で確認できる。IV層はにぶい黄褐色シルト層である。調査区北東に寄るほど厚く確認できる。V層は褐色～灰黄褐色砂層である。調査区北西によるほど厚く確認できる。VI層はにぶい黄褐色シルト層で、調査区のほとんどの個所で確認できる。VII-1層は黒色粘土層、VII-2層は褐色粘土層である。VII層は古代以前の浜堤あるいは自然堤防後背湿地由来の粘土層と考えられ遺物を含まない。第1次調査および第2次調査の際に、VII層は北へ向かって傾斜し、X-212617付近からX-212582付近まで幅約35mの深い谷地形が存在し、IV・V・VI層、特にV層が厚く堆積していることが確認された。これらの層は遺跡の立地する場所が度々洪水の被害を被る場所であることを示し、また遺跡廃絶後に阿武隈川によって運搬された土砂であるII層によって遺跡が良好に保存されてきたと言える。

遺構確認面は、IV層にぶい黄褐色シルト層上面、さらにV層砂層上面の2面がある。遺構確認面1で確認される遺構は、十和田a火山灰を含むことが第2次調査で確認されており、10世前葉以前のものである。遺構確認面2で確認される遺構はさらにそれ以前のものと言える。調査区南西よりでは削平を受けたためかIV層もしくはIV層とV層いずれも確認されず、VI層上面が遺構検出面となる。

調査では、I層～III層、あるいはIV層までを重機により除去し、それ以下を人力で掘削した。IV層上面およびV層（あるいはVI層）上面での遺構確認を心掛けたが、遺構埋土との識別が難しく、VII層上面まで掘り下げて遺構を確認した。VII層上面で遺構を確認した場合の標高はおよそ4.00mである。



第4図 基本層序模式図

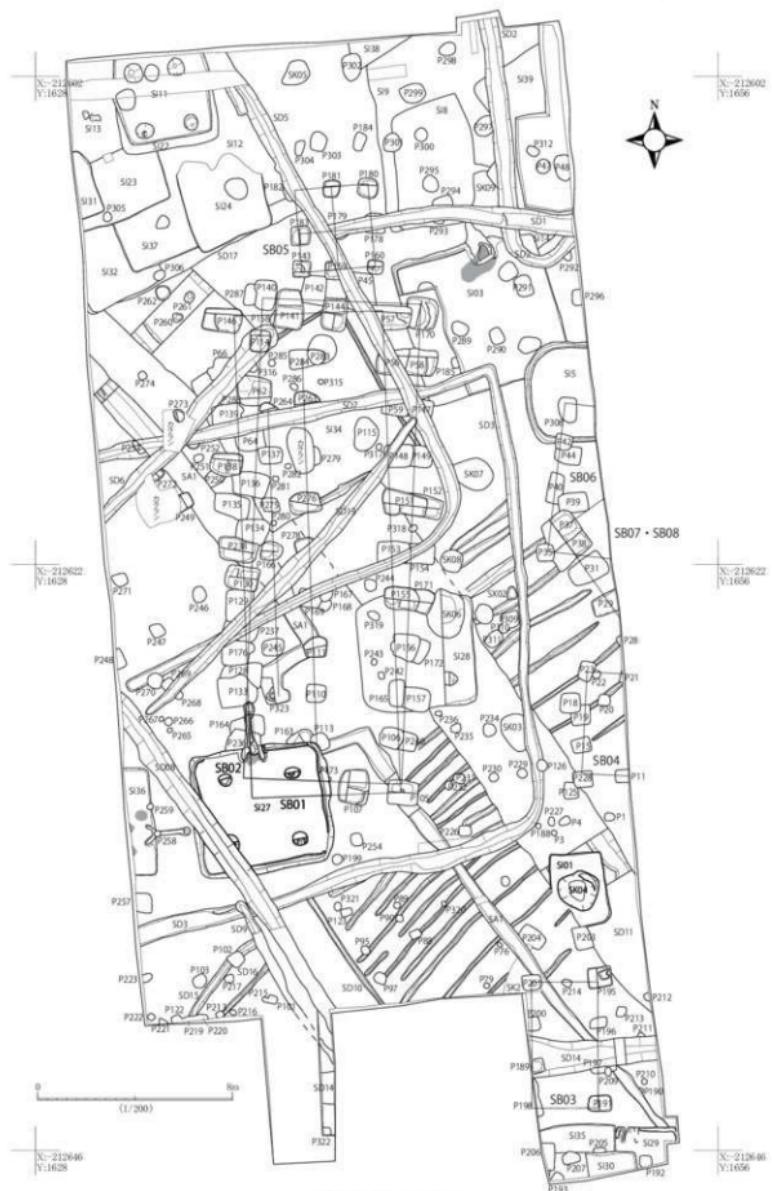
## 2. 発見した遺構と遺物

調査の結果確認した遺構は、竪穴建物跡 24 軒、掘立柱建物跡 7 棟、材木塀跡 1 条、溝跡 16 条、小溝状遺構群、土坑 7 基、性格不明土坑 1 基のほか、ピットとした小型の土坑を多数確認した。

出土遺物には、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、カマド支脚や羽口などの土製品、刀子などの鉄製品、砥石などの石製品などがあり、平箱で総数約 30 箱分の量である。これらの中で主体を占めるのが古墳時代後期から古代にかけての遺物である。これらには遺構確認中に出土したものその他に機械掘削中、遺構検出作業中に発見されたものも多く含まれている。また遺構により必要に応じて完掘、一部調査、確認のみと調査度合いを分けて調査しており、それにより遺物量の多寡がみられる。なお、



第5図 第1次調査と第3次調査の調査区全体図



第6図 調査区全体図

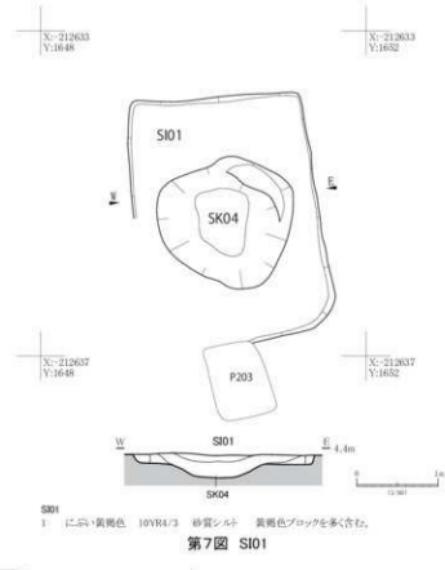
古代の土器の年代観については、今回の土師器・須恵器を実見された村田晃一氏からのご教示や氏の宮城県中・南部の土器編年（村田：2007 以下、A編年とする）、および多賀城周辺における平安時代前半の土器編年（村田：1994 以下、B編年とする）に多く準拠している。以下に遺構種別ごとに遺構図と遺物実測図を示し概要を述べる。

#### a. 穴穴建物跡

SI01（第7・8図）

調査区南東部 F2 グリッドに位置する。SK04 と重複し、SK04 が新しい。平面長方形で、東西 2.25m、南北 3.06m、軸方位は N-2° -W である。床面は平坦で、確認面からの深さは 0.12m である。周溝・貼床は確認できなかった。壁は斜めに立ち上がる。

出土遺物には堆積土から出土した土師器、鉄製品などがある。また堆積土中から焼けた骨片が検出されている。図示できたのは堆積土から出土した土師器の瓶 1 点のみである。これは無底の瓶であり、古墳時代後期から終末期、6～7世紀に多く認められる特徴である。土師器で非ロクロの瓶は8世紀にはほぼ姿を消



番号	断面・部位	理別	層種	外 面	内 面	残 存	寸法 mm			分類 国際
							口径	近径	高さ	
1	右次・無縫 土	上部器	直	～ラケズリ	ハラヒゼキ	底削下平 1/1	8.3		9-1	

第8図 SI01 出土遺物

すようである。そのほかの図示できなかった土師器の多くが非ロクロである。これらのことからSI01についてではおおむね6～7世紀頃に近い年代の可能性が推測される。

#### SI03（第9～12図）

調査区北東部 D8・D9・E7・E8・E9・F8・F9 グリッドに位置する。SI05・SD01・SD02・P55・P56・P57・P58・P147と重複し切られている。平面方形で、東西 6.12m、南北 6.00m、軸方位は N-17° -W である。床面は平坦で部分的に貼床をし、確認面からの深さは 0.15m である。北壁と西壁下で周溝を確認した。主柱穴は南西を除く P1～P3 を確認した。カマドは北壁東寄りに構築され、両袖と煙道部、カマド高架材と思われる石材を確認した。P289・P290・P291 は床面精査後に貼床の下に確認したピット状の遺構で SI03 よりも古い遺構と考えられる。

出土遺物には堆積土、床面直上、カマド周辺などから出土した土師器・須恵器、土製品、石製品などがあり、図示できたのはその中の土師器 14 点、支脚 1 点、磨石 1 点である。

土師器には壺、手づくね土器、蓋、甕、瓶があり、その他の図示できなかった資料も含めて全て非ロクロである。壺は浅身の椀に近いタイプ、体部中位に軽い棱をもつタイプが認められる。手づくね土器は指によるオサエやナデで製作されている。蓋は 2 点あり、いずれもカマド内から出土している。把手の付く第 10 図 4 は凝灰岩を整形したカマド焚口高架材に接して逆位で出土したもので、煤などの使用痕跡が見られないことからカマドに関わる祭祀的な使われ方も考えられる。なお、この蓋の形態に類似した土製品で小型のものは福島県いわき市夕日長者遺跡 5 号住居跡などから出土しており、鏡を模した祭祀土製品と考えられている（いわき市教育委員会：1981）。また、南相馬市五戸田 B 遺跡の 1 号住居跡からも夕日長者遺跡と同様の土製模造鏡が出土しており、カマド廃絶に伴う祭祀的行為に関わる遺物と考えられている（福島県教育委員会：2017）。両遺跡とも古墳時代後期の遺物である。蓋の他の 1 点は器面の凹凸が著しく、片面には使用時の際の黒化が確認される。甕は小型と大型があり、外面の器面調整にはハケメ主体とヘラナデヤヘルケゼリ主体がある。また頸部の段が顕著でないものもみられ、体部が下膨れでないことも特徴である。瓶は無底である。これらの土師器の壺や甕は住社式でも後半頃に相当するものとみられ、村田 A 編年の 2 段階、6 世紀後半頃に位置づけられるものと考えられる。

SI03 の廃絶時の資料にはカマド付近から出土した土師器の甕などがあり、これらから本建物跡は時期的には 6 世紀後半頃と推定される。

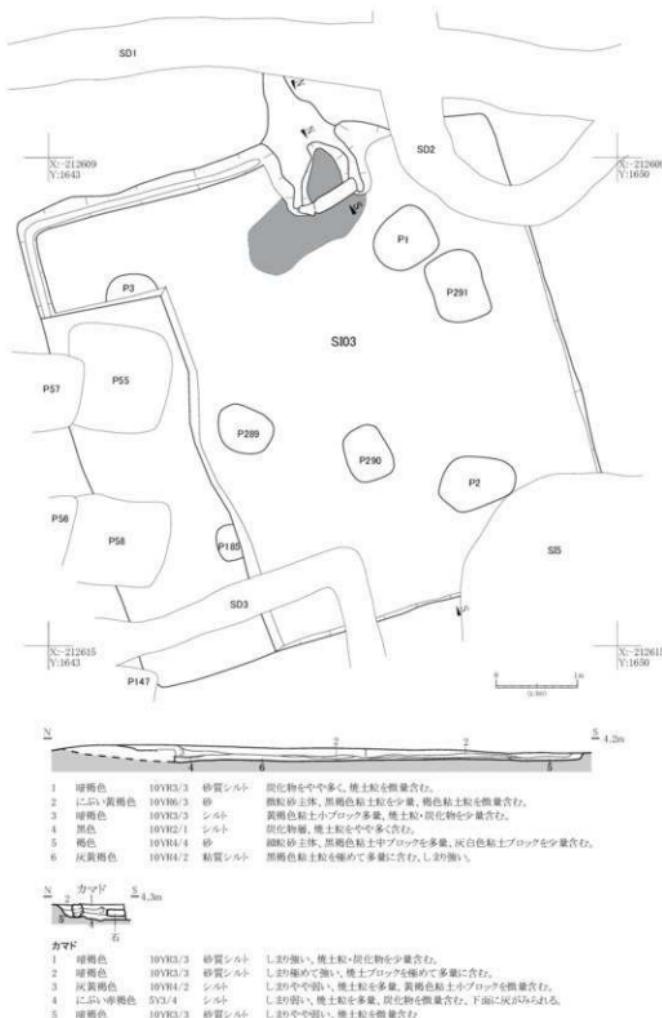
#### SI05（第 13・14 図）

調査区北東部 F7・F8 グリッドに位置する。P42・P308 と重複し切られる。平面隅丸方形で、東西 2.73m、南北 4.00m を確認し、軸方位は N-2° -W である。床面は黒褐色・暗褐色粘土で貼床し平坦で、確認面からの深さは 0.35m である。北壁・西壁・南壁下で周溝を確認した。主柱穴・カマドは確認できなかった。

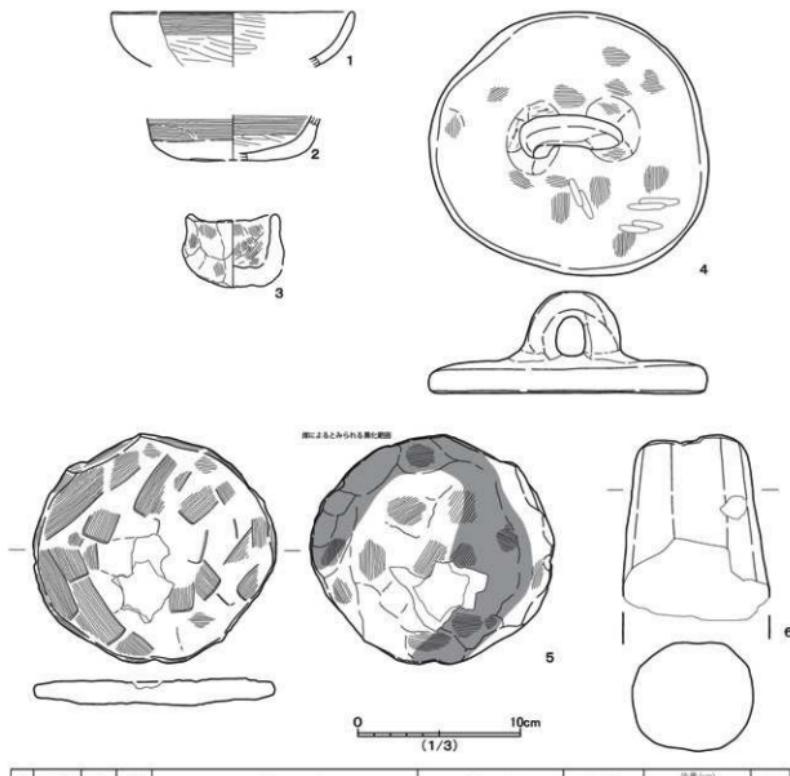
出土遺物には堆積土、床面直上などから出土した土師器・須恵器、鉄製品などがあり、図示できたのはその中の鉄製品 1 点である。これは刀子の刀身基部から茎にかけての部分である。図示できなかった土師器のほとんどが非ロクロであること、重複関係からは SI03 より新しいことなどから、ここでは本建物跡の時期を 6 世紀後半から 8 世紀以前と幅を持たせて考えておきたい。

#### SI08

調査区北東部 D9・D10・E9・E10 グリッドに位置する。調査は実施していない。P294・P295・P300・P301・SK09 と重複し切られ、SI09 より新しい。平面不正長方形で、東西 3.20m、南北 5.35m、軸方位は N-2° -W である。

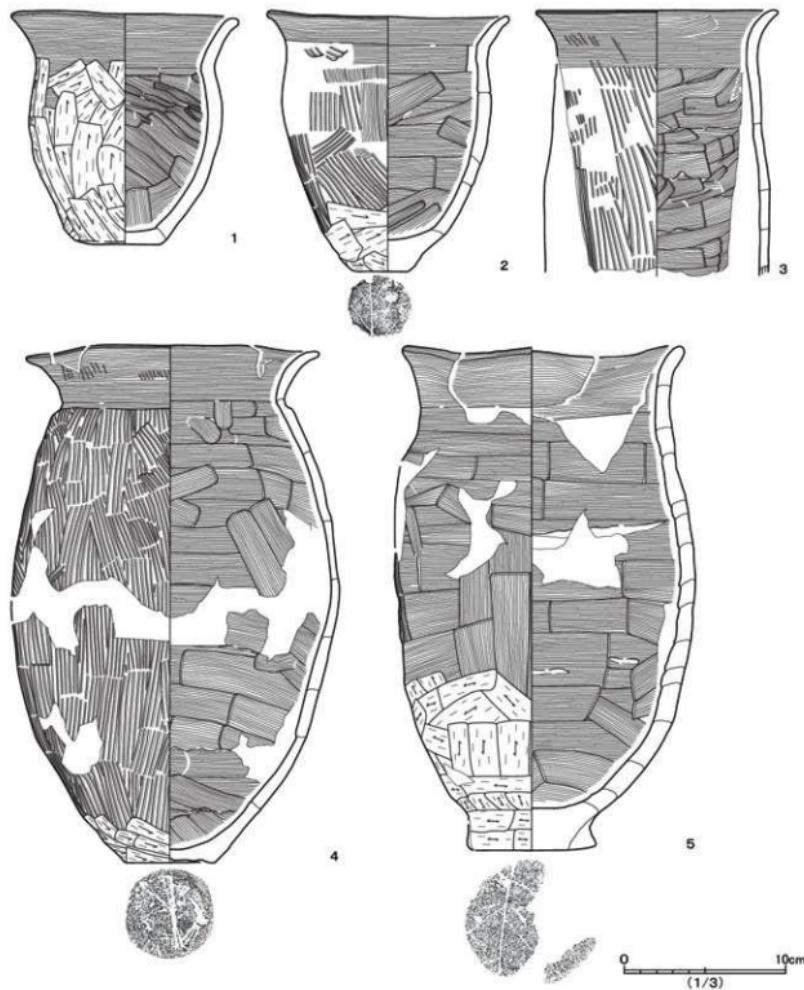


第9図 SI03



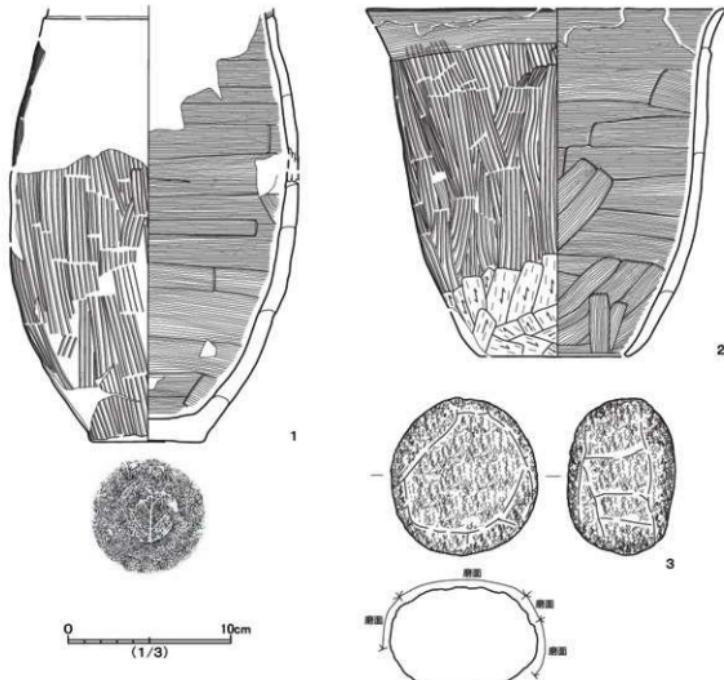
第10図 S103出土遺物1

番号	断面・部位	種類	目録	外　面	内　面	残　存	計量(cm)			写真図版
							山根	長根	扁根	
1	埴輪上 土製品	片	ヨコナギ・ヘラシガキ	ヘラシガキ	山根部～全体1/3		13.0			
2	埴輪上 土製品	片	ヨコナギ・ナギ・ヘラシガキ	ヨコナギ・ヘラシガキ	山根部～全体1/4					9-2
3	D IX 埴上	チブ 土製品	ヨビモササ・ナギ	ヨビモササ	全体の1/4	5.8	4.2			9-3
4	カツジ 高麗瓦輪	土製品	蓋	上面半周に把手、全面ケブリのちナゲで整形。把手はナグツゲ。	定位		径16.2～17.3、厚さ2.6、 重5.60kg			9-4+5
5	カツジ付瓦	土製品	蓋	両面ヨハタナゲでナゲ。側面はナゲで整形しているが、背面側面、片面の薄辺が僅で墨化している。	一部欠損		径14.1～15.8、厚さ1.3、 重5.23kg			9-6+7
6	カツジ地根 蓋	土製品	支脚	下方90°に扇形で整形されている。	上部の2r		直径11.0、厚さ0.8、厚さ 1.7cm			



番号	断面・周辺	規型	器種	外 面		内 面	操作	測量(5cm)		等真図版
				横径	直徑			横径	直徑	
1 カマド 燃焼盤	上鉢部 裏	便	ヨコナダ・ハラナダ・ヘラケヅリ、底部ハラケヅリ	ヨコナダ・ハラナダ	ヨコナダ1/2、体→底 直1/1	14.1	6.4	14.5	9.9	
2 垂柱土 上鉢部	便	ヨコナダ・ハラナダ・ハケメ・ハラケヅリ、底部木漬瓶	ヨコナダ・ハラナダ	ヨコナダ2/3、体→底 直1/1	15.8	3.8	16.2	10-1		
3 カマド 上鉢部	便	ヨコナダ・ハケメ・ハラナダ(ハラナダに近い)	ヨコナダ・ハラナダ	ヨコナダ→体頂上平 直1/3	15.8					
4 垂柱土 上鉢部	便	ヨコナダ・ハケメ・ハラケヅリ、底部木漬瓶	ヨコナダ・ハラナダ	ヨコナダ1/2、体頂→ 底直1/1	18.2	1.5	22.0	10-2		
5 カマド 上鉢部	便	ヨコナダ・ハラナダ・ヘラケヅリ、底部木漬瓶	ヨコナダ・ハラナダ	ヨコナダ→体頂1/2、 底直1/1	17.6	6.0	21.3	10-3		

第11図 SI03出土遺物2



第12図 SI03出土遺物3

## SI09

調査区北東部 D9・D10・D11・E9・E10・E11 グリッドに位置する。調査は実施していない。SI08・SI38・SI39・P294・P295・P297・P298・P299・P300・P301・SK09・SD01・SD02 と重複し切られる。西辺と南辺の一部を確認したのみであるが、第1次調査1トレンチ北部で確認した SI04 と同一構造と考えられる。SI04 は北壁にカマドを構築し、2.1m 突出する煙道部を有する。SI09 と SI04 を同一構造と考えた場合、平面方形で東西 7.90m 以上、南北 8.20m、軸方位は N-6° -W である。第2次調査1トレンチ東壁の観察では、床面は北に向かって傾斜しており、黒褐色および褐色粘土ブロックによる厚い貼床を施す。確認面からの深さは 0.42m で周溝は見られない。

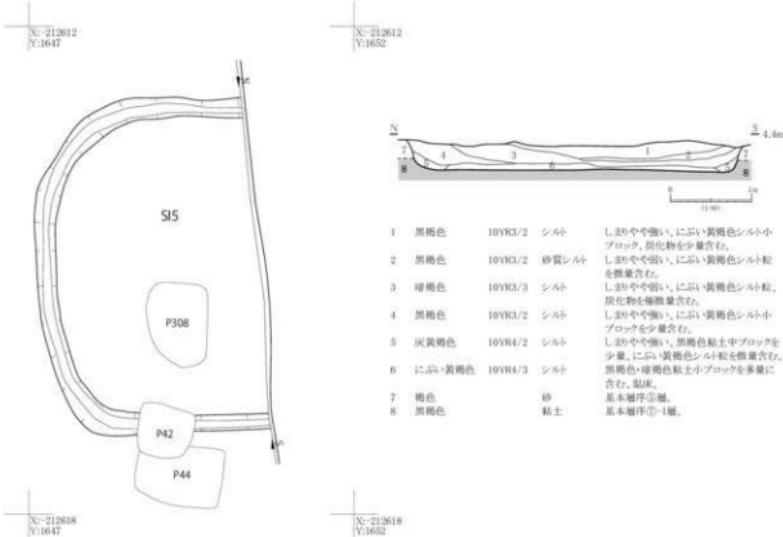
## SI11 (第15~18図)

調査区北西部 A10・A11・B10・B11 グリッドに位置する。平面方形で、東西 3.95m、南北 3.90m 以上、

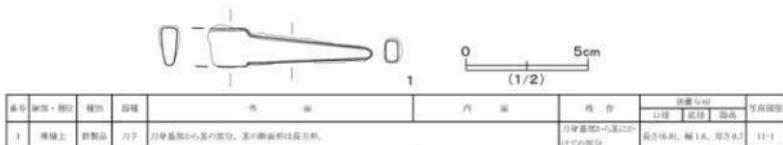
軸方位はN $10^{\circ}$ Wである。床面は平坦で、確認面からの深さは0.16mである。主柱穴P1～P4を確認した。カマド・周溝は確認できなかった。

堆積土や床面上に、柱穴などから多量の遺物が出土している。図示できたのは土師器12点、須恵器13点、羽口1点、回石1点である。なお第2次調査時にも遺物が出土し、土師器、須恵器それぞれ1点を図示・報告している。

土師器の壺はロクロで製作され、多くの底部の切り離しは回転糸切りか不明で、その後に回転や手持ちによるヘラケズリが全面近く施されている。第2次調査時の土師器壺も回転糸切り後に周辺部が手持ちヘラケズリの再調整が施されているものである。第16図7の底部外面には「正」と「八」の字が上下に並ぶ墨書があり、これについては「天」の異体字か則天文字ともみられる(東野:1994)。土師器の甕にはロクロと非ロクロの両者があり、前者の1点は内面がヘラミガキ・黒色処理のものである。後者の甕頭部には段はみられない。須恵器の壺の底部の切り離しには回転糸切りと回転ヘラ切りが混在し、その後の再調整がないのが大半である。その中の1点の体部には「又」の墨書が、もう1点の底部には「長」の可能性のある墨書が確認される。ほかに須恵器では短頭壺や長頭壺などが出土している。回石は粒子の粗いゴツゴツした安山岩とみら



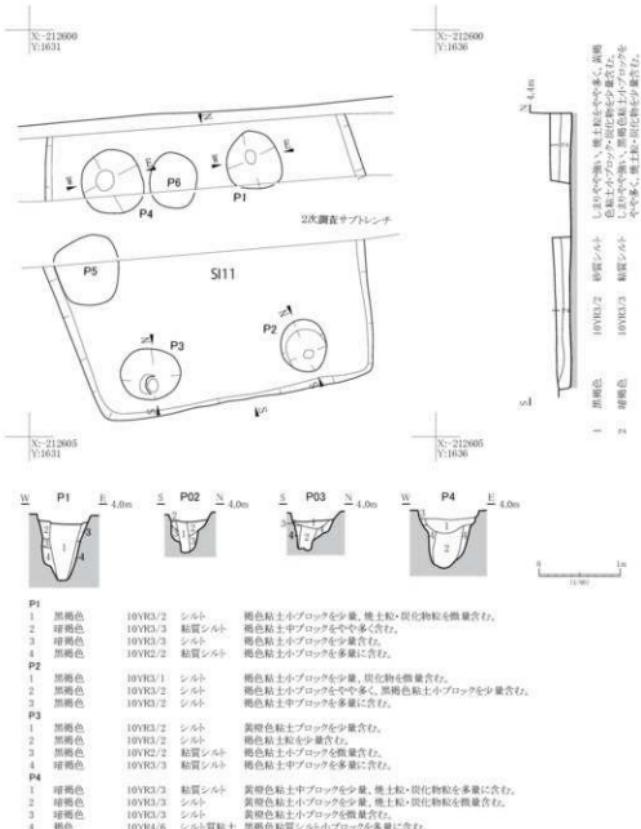
第13図 SI05



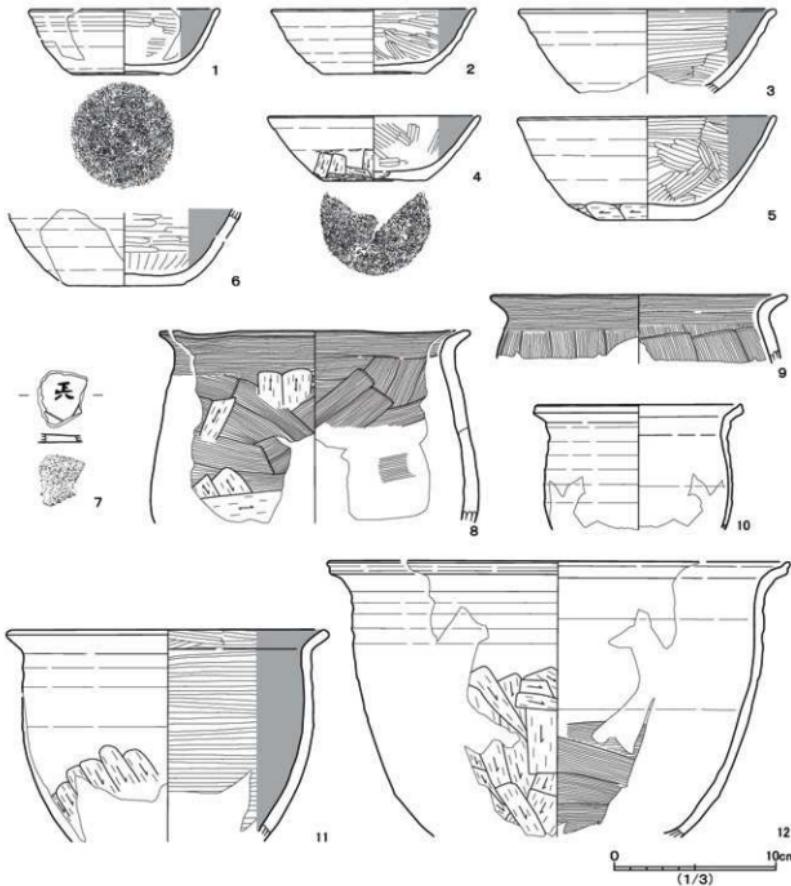
第14図 SI05 出土遺物

れる円窓を石材とし、凹みや太い線条痕、磨面が確認されるものである。同様の石材の石製品はSI03などのほかの遺構からも出土しており、用途など今後の検討課題である。鉄生産に関わる遺物には羽口のほかに、鉄滓が付着した炉壁片が堆積土から出土している(写真図版 14-1・2)。

土器については土師器の坏は底部が再調整主体であること、須恵器の坏は切り離し手法が混在し、再調整がほとんどみられないことなどの特徴から、村田B編年の3群土器段階、平安時代前半の9世紀後葉頃の時期のものと考えられる。SI 11も時期的にはその頃の年代に位置づけられる。第2次調査概要報告書では本建物跡の出土土器を9世紀前半頃と推定したが、今回この年代については訂正しておきたい。なお、第17図 13は短頸壺の可能性のある瓶類で、器形や胎土などの特徴から7世紀頃の東海地方の製品と推定される。

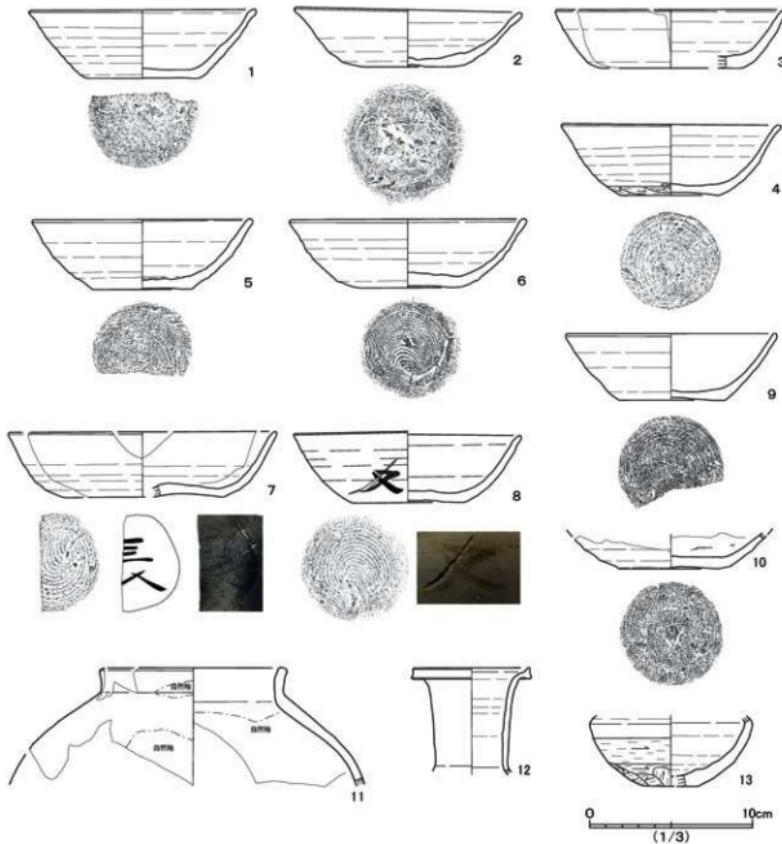


第15図 SI11



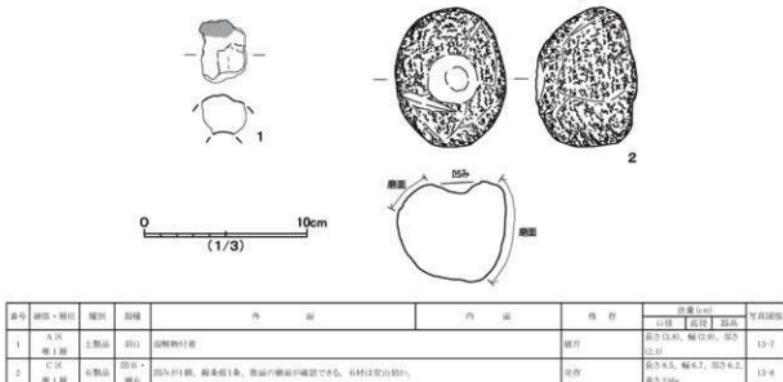
第16図 SI11出土遺物1

番号	組合・層位	器種	外　面	内　面	堆　存	測定値		当該箇所
						口徑	底径	
1	C区 深縫目上	土師器	ロフナナギ・底面川刷毛切削後に周縁削除・ハラケガリ	ハラケガリ・黑色処理	口縁部～体部上半 底部 1/3	11.6 (標準)	6.8 4.1	
2	深縫目上	土師器	ロフナナギ・底面手持打・ハラケガリ(切削痕)半明	ハラケガリ・黑色処理	全体の 1/2	12.7	6.5 4.0	II-2
3	堆積土	土師器	ロフナナギ	ハラケガリ・黑色処理	口縁部～体部 1/3	16.0		II-3
4	堆積土	土師器	ロフナナギ・ハラケガリ・底面手持打・ハラケガリ(切削痕)不明	ハラケガリ・黑色処理	口縁部～体部 3/4 底部 1/3	13.2	6.5 4.0	II-4
5	D区 深縫目上	土師器	ロフナナギ・ハラケガリ	ハラケガリ・黑色処理	口縁部 1/2	16.1	6.0 4.3	II-5
6	E1区 柱地盤	土師器	ロフナナギ・底面手持打・ハラケガリ(切削痕)不明	ハラケガリ・黑色処理	体部 1/4		7.6	
7	E2区 柱地盤	土師器	底面川刷毛切削・表面あらわ、「火」の具体字が若干文字こみられる。葉 形の縦縫合	ハラケガリ・黑色処理	底面部分			II-6
8	堆積土	土師器	ロフナナギ・ハラケガリ・ハラケガリ	ロフナナギ・ハラケガリ	口縁部～体部上半 1/3	19.2 (標準)		
9	D区 深縫目上	土師器	ロフナナギ・ハラケガリ	ロフナナギ・ハラケガリ	口縁部～体部上半 1/3	18.9 (標準)		II-7
10	堆積土	土師器	ロフナナギ	ロフナナギ	口縁部～体部上半 1/3	13.6		II-8
11	堆積土	土師器	ロフナナギ・ハラケガリ	ハラケガリ・黑色処理	口縁部～体部 1/3	20.0		II-1
12	堆積土	土師器	ロフナナギ・ハラケガリ	ロフナナギ・ハラケガリ	口縁部～体部 1/3	26.0		II-2



番号	断面・層位	種別	経年	外　面	内　面	性　質	比較(rod)	参考図版	
1	丸窓 ガラス片	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし)	ロクロナギ	全体の1/2弱	11.0 (1.0)	6.9 (3.7)	4.2 (2.3)
2	丸窓 ガラス片	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(新・ケツイガ調整)	ロクロナギ	山腹側～体幅3/4、 底面1/1	11.1 (1.1)	7.0 (3.8)	3.7 (2.4)
3	埋地土上層	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(新・手持ちハラカズリ)	ロクロナギ	全体の1/5	11.2 (1.2)	6.8 (3.6)	3.6 (2.5)
4	埋地土上層	鉢形器	新	ロクロナギ・ハラカズリ・底凹面から切(再調整なし)	ロクロナギ	口縁側～体幅5/6、 底面1/1	11.3 (1.3)	6.0 (3.5)	4.0 (2.6)
5	埋地土	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし)	ロクロナギ	全体の2/3	11.3 (1.3)	6.1 (3.5)	4.1 (2.7)
6	埋地土、T1	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし)	ロクロナギ	口縁側～体幅2/3、 底面1/1	11.1 (1.1)	5.8 (3.5)	4.2 (2.4)
7	C式 丸窓	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし)、基準「背」か ら	ロクロナギ	山腹側～体幅1/4、 底面1/1	10.4 (1.0)	9.8 (4.0)	4.0 (2.1)
8	T2	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし)、基準「文」	ロクロナギ、底面の摩耗部	山腹側～体幅2/3、 底面1/1	11.0 (1.0)	6.8 (3.5)	4.1 (2.5)
9	A式、床脚	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし)	ロクロナギ	山腹側～体幅1/3、 底面2/3	11.0 (1.0)	6.5 (3.5)	3.5 (2.3)
10	P1	鉢形器	新	ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし)	ロクロナギ、底面に摩耗	底面1/1、底面2/3	11.0 (1.0)	6.5 (3.5)	4.2 (2.4)
11	埋地土上	鉢形器	初期古	ロクロナギ・底脚無	ロクロナギ	山腹側～體幅1/4	11.1 (1.1)	7.2 (3.8)	4.1 (2.4)
12	埋地土上	鉢形器	初期古	ロクロナギ	ロクロナギ	山腹側1/2	7.2 (1.2)		3.2 (2.2)
13	C式 堆土層	鉢形器	初期古	切欠込み、ロクロナギ・底凹面から切(再調整なし) 底面1/1に自然剥離がある	ロクロナギ	体幅下半～底面1/1	11.0 (1.0)	6.5 (3.5)	3.6 (2.4)

第 17 図 SII1 出土遺物2



第18図 SI11出土遺物3

**SI12**

調査区北西部 B10・C9・C10 グリッドに位置する。SI11・SI22・SI24 と重複し切られている。SD17 より新しい。南辺の一部のみ確認し、平面形・規模等不明である。

**SI13（第19・20図）**

調査区北西部 A10・A11 グリッドに位置する。調査は実施していない。第2次調査4トレンチ西部で確認した際は SI13・SI15 の2軒の竪穴建物跡と認識していたが、今回の調査では SI13 1軒として扱う。SI11・SI22・SI31 に切られ、SI23 より新しい。南辺の一部を確認し、平面形・規模等は不明である。第2次調査4トレンチ北壁の観察では、確認面からの深さは 0.37m で黒色粘土を用いた貼床を施す。確認面でカマド構築材と考えられる石材が確認されている。同様な石材は SI03 でも確認されている。

堆積土上層から土師器が少量出土しており、その1点を図示した。これは有段丸底の壺とみられる。口縁部は外傾し、外形に段をもち内面が屈曲するもので、内面は黒色処理が施されている。特徴から栗田式に比定され、村田A編年の3~4段階、7世紀頃に位置づけられる。SI13の調査についてはプラン確認のみであるが、SI23との重複関係を考慮すると、この年代が建物跡の時期を示すものではない。

**SI14**

調査区北東部 F9 グリッドに位置する。調査は実施していない。SI03・SI09・SD01・SD02 に切られる。南東辺をわずかに確認したのみで平面形・規模等不明である。

**SI22（第19・21図）**

調査区北西部 A10・B10 グリッドに位置する。調査は実施していない。SI11 に切られ、SI12・SI13・SI23 より新しい。平面形は方形とみられ、東西 4.06m、南北 2.10m 以上、軸方位は N~10° ~W である。

図示した須恵器1点が南壁付近の堆積土から出土している。(ほかに出土遺物はない。底部は回転ヘラ切りで切り離され、その後に手持ちヘラケツリの再調整が施されている。底部外面に線状に墨痕が確認されるが保存状況が悪く、「玉」という墨書の可能性もあるが不確かである。須恵器は特徴から平安時代前半の9世紀中葉前後とみられ、SI22もその頃の年代の可能性が考えられる。

**SI23（第19・22図）**

調査区北西部 A9・A10・B9・B10 グリッドに位置する。調査は実施していない。SI13・SI22・SI31・P305 に切れ、SI32・SI37 より新しい。平面形は方形とみられ、東西 3.80m 以上、南北 2.70m 以上、軸方位は N-19° ~W である。

堆積土から土師器・須恵器、鉄製品、石製品が出土しており、その中の土師器2点、須恵器1点を図示した。土師器は壺で、底部は回転糸切りで再調整が施されないものである。須恵器は底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもので、再調整はみられない。これらの土器は特徴などから平安時代前半の9世紀中葉前後とみられ、SI 23 もその頃の年代の可能性が考えられる。

**SI24（第19・23図）**

調査区北西部 B9・B10・C9・C10 グリッドに位置する。SI12・SI37・SD17 より新しい。北壁を確認できなかつたが貼床による床面の広がりをある程度確認することができた。平面長方形で、東西 3.44m、南北 3.80m 以上を確認し、軸方位は N-16° ~W である。床面は黒褐色・暗褐色粘土で貼床し平坦で、確認面からの深さは 0.07m である。主柱穴と考えられるビットを 1 基確認したが、カマド・周溝は確認できなかつた。

堆積土や床面直上から土師器が少量出土しており、その中の土師器壺2点を図示した。第23図1は有段丸底壺で外面中位に段をもち、底部の丸みが強いものである。2は段のない半球形の形態のものである。これらの土師器の壺の特徴から住社式に相当するものとみられ、村田A編年の2段階、6世紀頃に位置づけられるものと考えられる。SI 24 もその頃の年代の可能性が考えられる。

**SI31（第19・24図）**

調査区北西部 A9・A10 グリッドに位置する。SI13・SI23 より新しい。東壁と南壁・北壁の一部を確認した。平面方形で、東西 1.00m 以上、南北 2.74m を確認し、軸方位は N-20° ~W である。床面は黒褐色・暗褐色粘土で貼床し平坦で、確認面からの深さは 0.12m である。カマド・柱穴・周溝は確認できなかつた。

堆積土から土師器や磨石が出土しており、土師器は全て非クロのものである。その中の土師器甕1点を図示した。これは底部のみで、底面には木葉痕が確認された。図示できなかつた土師器には壺で有段丸底とみられる破片が数点あり、これらの特徴から住社式か栗圓式に相当するものとみられる。村田A編年の2～4段階、6～7世紀頃に位置づけられる。しかしながら SI23 との重複関係を考慮すると、この年代が建物跡の時期を示すものではない。

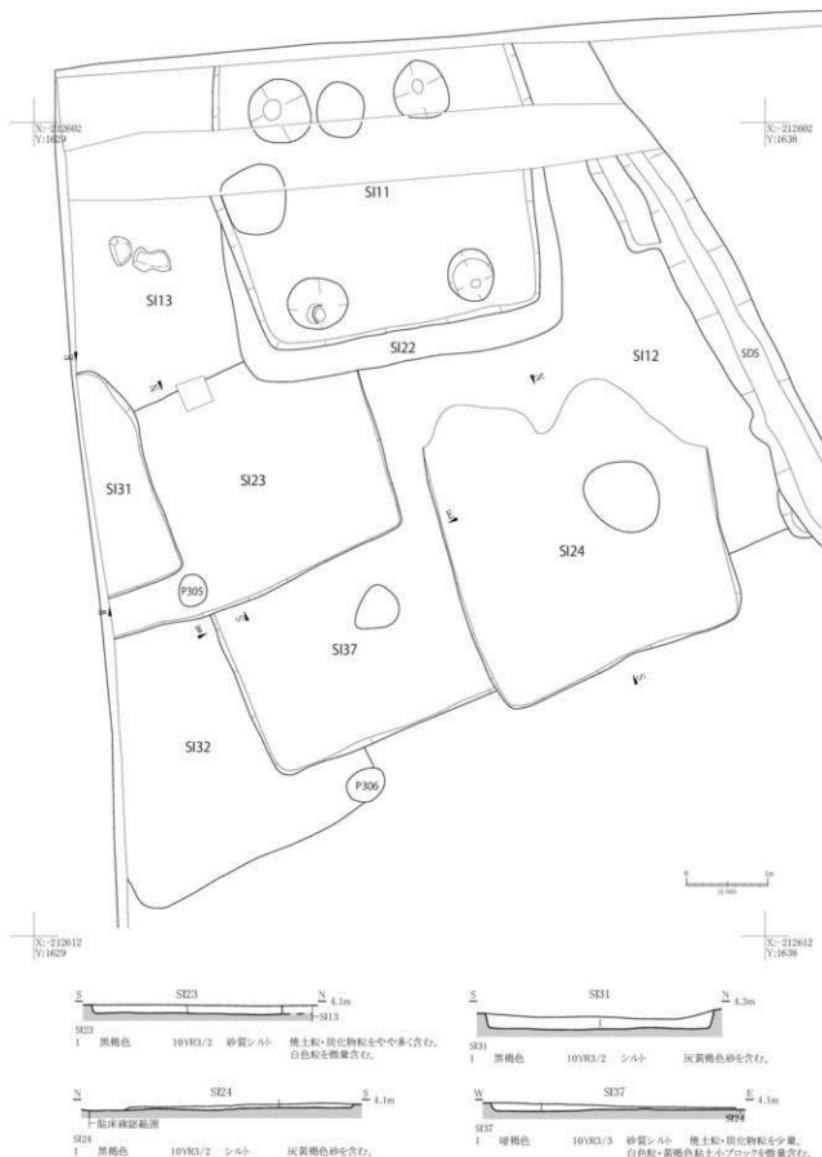
**SI32（第19・25図）**

調査区北西部 A8・A9・B9 グリッドに位置する。調査は実施していない。SI23・SI37・SD17・P306 より新しい。南壁と東壁・西壁の一部を確認した。平面方形で、東西 3.33m、南北 3.20m 以上を確認し、軸方位は N-27° ~W である。

プラン確認のみの堅穴建物跡であるが、堆積土上部から土師器が1点出土しており、図示した。これは平底風の鉢で、口縁部がわずかに外弯するものである。特徴から住社式か栗圓式に相当するものとみられ、村田A編年の2～4段階、6～7世紀頃に位置づけられる。SI 32 もその頃の年代の可能性が考えられる。

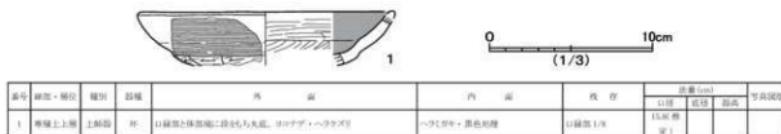
**SI37（第19・26図）**

調査区北西部 A9・B9 グリッドに位置する。SI23・SI24 に切れ、SI32 より新しい。南壁と西壁の一部を確認し、平面形は不明である。規模は東西 2.90m 以上、南北 2.84m 以上を確認し、軸方位は N-22° ~W である。床面は黒褐色・暗褐色粘土で貼床し平坦で、確認面からの深さは 0.10m である。柱穴と考えられるビットを 1 基確認したが、カマド・周溝は確認していがない。

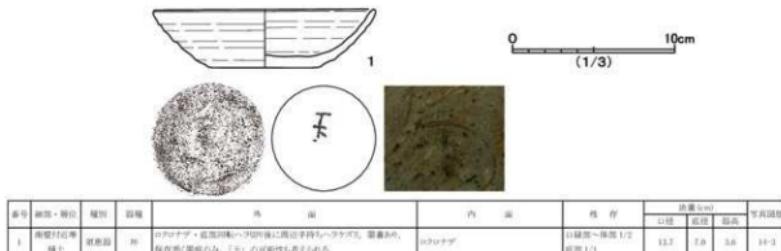


第19図 SI12・SI13・SI22・SI23・SI24・SI31・SI32・SI33・SI37

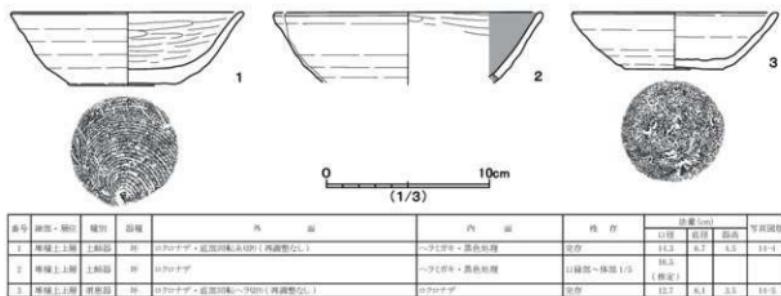
堆積土から土師器や須恵器が少量と鳥骨とみられる骨片が出土しており、その中の土師器3点を図示した。1と2は有段丸底の杯とみられ、3は体・底部が半球形をなし、内湾気味に口縁部が立ち上がる椀に近い形態のものである。特徴からこれらは住社式か栗園式に相当するものとみられ、村田A編年の2~4段階、6~7世紀頃に位置づけられる。SI 37もその頃の年代の可能性が考えられる。



第20図 SI13出土遺物



第21図 SI22出土遺物

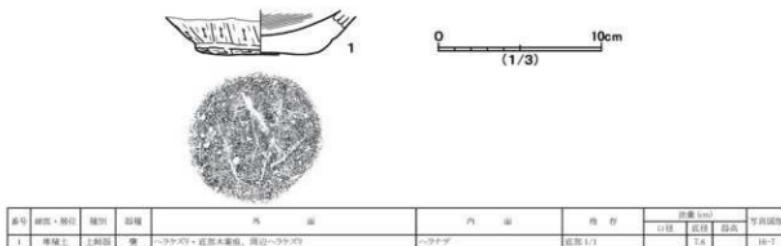


第22図 SI23出土遺物

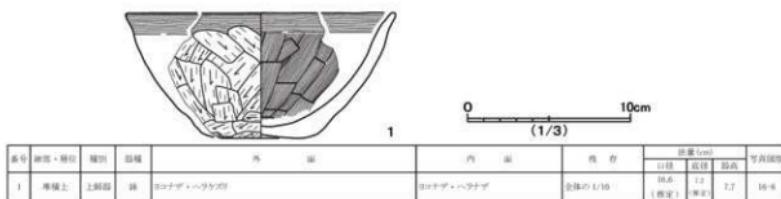
### 第Ⅲ章 調査成果



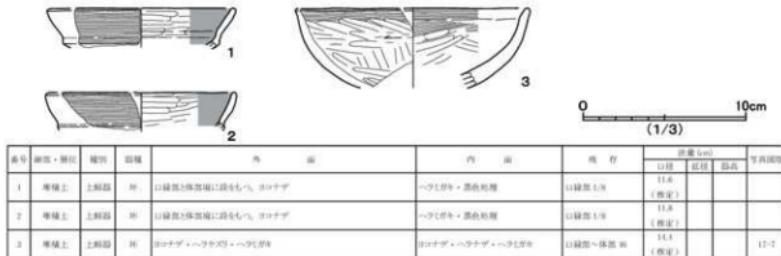
第23図 SI24出土遺物



第24図 SI31出土遺物



第25図 SI32出土遺物



第26図 SI37出土遺物

**SI27 (第 27 ~ 30 図)**

調査区南部 B 2・B 3・B 4・C 2・C 3・C 4 グリッドに位置する。SD08 に切られ、SB01・SB02 より新しい。平面方形で、東西 5.65m、南北 5.15m、軸方位は N-7° -W である。床面は平坦で貼床をし、確認面からの深さは 0.38m である。北壁西半以外の全周で周溝を確認し、主柱穴 P 1~P 4 を確認した。カマドは北壁中央に構築され、両袖と 1.93m 突出する煙道部が残存していた。

出土遺物には堆積土、床面直上、カマド周辺、柱穴、住居貼床などから出土した土師器、須恵器、鉄製品、鉄錠などがあり、図示できたのはその中の土師器 7 点、須恵器 9 点である。

土師器には壺、鉢、甕、瓶がある。壺はロクロで製作され、底部は回転糸切り後に手持ちヘラケズリの再調整が施されている。鉢は器高が高く逆台形をなすもので、底部は全面が手持ちヘラケズリ再調整である。甕の第 29 図 5 はロクロで製作され、体部から底部まで回転ヘラケズリ再調整が施されている。内面は丁寧にヘラミガキ・黒色処理されている。第 29 図 7 は瓶が鉢の把手が剥落したものと考えられるもので、全面指によるナデ調整がなされている。須恵器には壺、高台付壺などがある。壺は底部の切り離しが 1 点の静止糸切りを除き回転ヘラ切りによるもので、後者はその後に軽いナデかヘラケズリの再調整が施されている。高台付壺は高台部が体部下端からやや内側に付くタイプで、壺部の切り離しは回転糸切りである。

土器については器種構成、土師器や須恵器の壺形態の特徴、底部がいずれも再調整主体であること、静止糸切り技法の存在などから、土師器の製作にロクロ技術が普及し始めた村田 A 編年の 8 段階、8 世紀末から 9 世紀前葉の頃に位置づけられる。SI 27 も時期的にはその頃の年代の建物跡と考えられる。

なお、堆積土からは須恵器の甕とみられる破片が出土している（第 30 図 3）。これは口縁部の下半部にあたり、外面には横方向に細かな波状文が描かれている。特徴などから TK 208 型式か TK 23 型式に比定されるものと考えられ、5 世紀後葉頃のものと推定される。同特徴をもつ甕破片は SD06 からも出土している（第 54 図 2）。

**SI28 (第 31・32 図)**

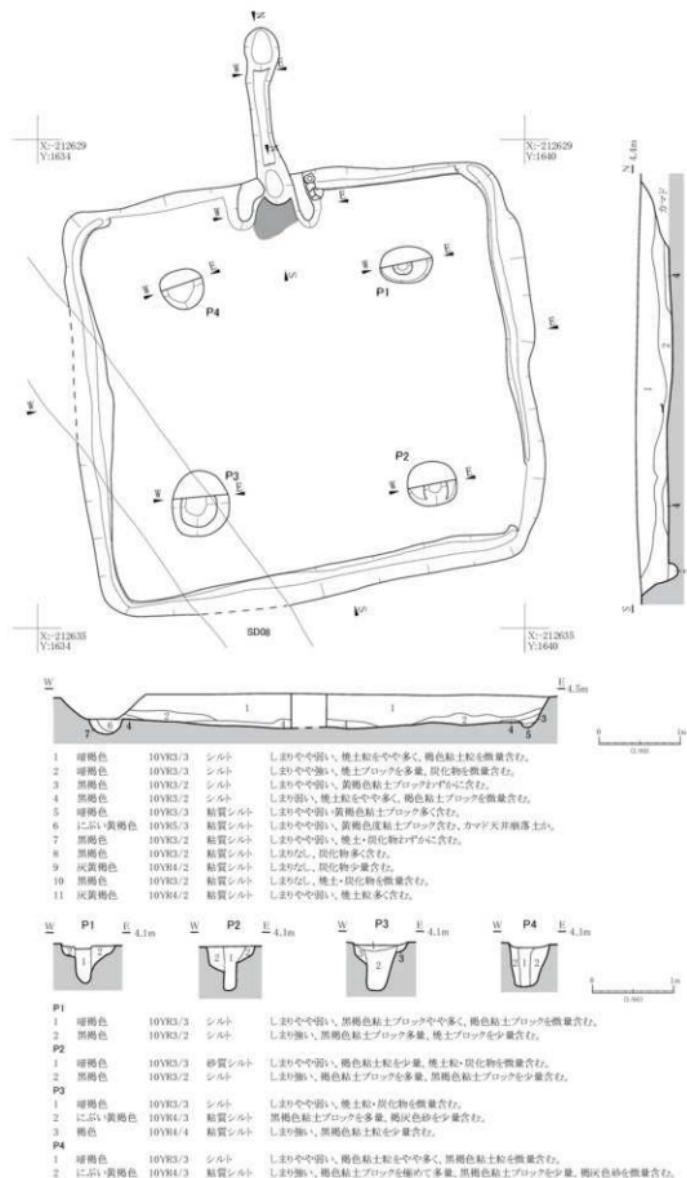
調査区中央部 D 4・D 5・E 4・E 5 グリッドに位置する。東壁側の一部を調査した。SB01・SB02・P242・P243・P319・SK06 に切られ、SD11 より新しい。平面方形で、東西 4.66m、南北 4.80m、軸方位は N-6° -W である。床面は平坦で貼床をし、確認面からの深さは 0.20m である。主柱穴 P 1・P 2 を確認した。カマド・周溝は確認されていない。

堆積土や柱穴から土師器が出土しており、その中の土師器高壺と甕 2 点を図示した。高壺は壺部内面がヘラミガキ・黒色処理のものである。甕は頸部に段ではなく、外面はヘラケズリ整形である。量が少なく不明な点が多いが、図示できなかった土師器壺には底部丸底も含まれており、これらの特徴から住社式か栗廻式に相当するものとみられる。村田 A 編年の 2~4 段階、6~7 世紀頃に位置づけられ、SI 28 もその頃の年代の可能性が考えられるが、一部のみの精査であることから、今後の吟味が必要である。

**SI29 (第 33・34 図)**

調査区南東部 G-1・G 0 グリッドに位置する。ほぼ床面のみを確認した。SI30・SI35 に切られている。P192 は床面を切るため SI29 より新しいと考えられる。北辺のみを確認し平面形は不明、東西 2.50m、南北 1.68m 以上、軸方位は真北方向である。床面は平坦で貼床を施す。カマドは北壁西寄りに構築し、一部右袖と支脚が残存していた。

堆積土、カマド内から土師器や須恵器、土製品が出土しており、その中の須恵器壺 1 点と土製支脚 1 点を図示した。須恵器壺は全体が褐色を呈し、焼成不良品とみられる。口縁部が屈曲し外反する珍しい器形を



第27図 SI27.1

しており、底部は回転糸切りで再調整がないものである。支脚は上半部分で、器面は縦方向に面取りされている。これらはカマド内で支脚上部に坏が逆位に披った状態で出土しており、カマド廃絶に伴う儀礼などの状況を示す可能性も考えられる。須恵器は特徴から9世紀頃に位置づけられるものと考えられ、SI 29もその頃の年代の可能性が考えられる。

#### SI30 (第33・35図)

調査区南東部F 1・G 1グリッドに位置する。SI29・SI35より新しい。北壁と東壁および西壁の一部を確認した。平面方形、東西3.60m、南北1.00m以上、軸方位はN $1^{\circ}$ -Wである。床面は平坦で黄褐色粘土で貼床を施し、確認面からの深さは0.22mである。カマド・周溝は確認していない。

堆積土から土師器や須恵器が出土しており、その中の須恵器坏1点を図示した。これは底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもので、その後に回転ヘラケズリの再調整が施されている。この須恵器は特徴から8世紀末から9世紀前葉頃に位置づけられるものと考えられ、SI 30もその頃の年代の可能性が考えられる。

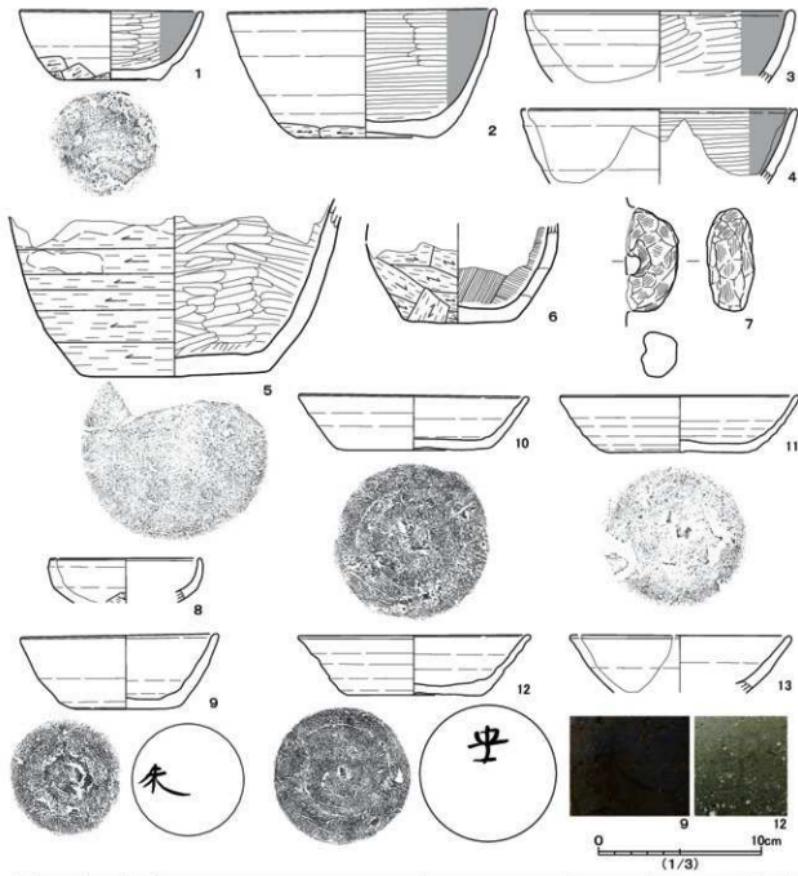
#### SI34 (第36・37図)

調査区中央部北寄りB 7・C 6・C 7・C 8・D 6・D 7・D 8グリッドに位置する。東半を調査した。SB01・SB02・SD06・SD07・SD13等に切られる。平面方形、東西6.97m、南北6.88m、軸方位はN $29^{\circ}$ -Wである。床面は平坦で貼床を施し、確認面からの深さは0.18mである。主柱穴P 1・P 2を確認し、周溝を東壁および北壁・南壁際に確認した。カマド確認していない。

堆積土、床面直上、カマド付近から全て非ロクロの土師器が出土しており、その中の土師器坏2点と甕1点を図示した。1は有段丸底の坏とみられ、段は体部下方に付き、内面の屈曲はみられない。2は被熱により内外面とも底部付近の器面が剥落しているが、そのほかにはぶい橙色をしており、胎土には砂粒が多く含まれている。器形は底部が丸底の坏で、外面上部に軽い段か棱をもち口縁部が外傾する。外面口縁部はヨコナデ、体・底部はヘラケズリ、内面はヨコナデ・ヘラナデの調整である。このような器形や器面調整などの特徴をもつ土師器は関東系土師器と呼ばれており、周辺では仙台市郡山遺跡（仙台市教委:2005）や藏王町十郎田遺跡（藏王町教委:2011）などから出土している。本遺跡の関東系土師器についての出自や背景などについてはさらに資料の増加を待って検討したい。3の甕は頸部に段はみられず、体部がヘラケズリにより調整されている。これらの土師器は特徴から田村A編年の4段階から5段階に比定され、7世紀後半頃から8世紀初頭頃に位置づけられる。したがってSI 34もその頃の年代の可能性が考えられる。



第28図 SI27 2



番号	断面・断面	種別	外 面	内 面	残 留	測量 (cm)			算出箇所
						口徑	底径	高さ	
1 A (K)	土師器	平	楕円、ロコロナデ・ヘラケズリ・刃部剥落の後に周辺手持ちヘラケズリ	ヘラケズリ・黑色处理	G縫隙 3%、他は	11.3	6.1	4.2	14-7
2 B (K)	土師器	縦	ロコロナデ・ヘラケズリ・底部手持ちヘラケズリ(切り離し不明)	ヘラケズリ・黑色处理	G縫隙～体壁 2/3、底端 1/3	10.5	7.9	8.5	14-8
3 C (K)	土師器	平	ロコロナデ	ヘラケズリ・黑色处理	G縫隙～体壁 1/5	10.4	(無測定)		
4 D (K)	土師器	平	ロコロナデ	ヘラケズリ・黑色处理	G縫隙～体壁 1/3	17.0			
5 E (K)	土師器	縦	ロコロナデ・円錐・ヘラケズリ・底部剥離・ヘラケズリ	ヘラケズリ・黑色处理	縫隙 1/3、底端 1/2	11.0			15-1
6 F (K)	土師器	縦	一型、楕円、ヘラケズリ・底部剥離	ヘラケズリ	縫隙 2/3、底端 1/4	6.7			15-2
7 G (K)	土師器	平	手持ち部分のみ認め、全面ロコロナ	手持ち部分					15-3
8 H (K)	土師器	平	ロコロナデ・ヘラケズリ	ロコロナデ	G縫隙～体壁 1/5	9.3			
9 I (K)	土師器	平	ロコロナデ・底部剥離～口部に軽いナマコヘラケズリ、墨書き「鬼」	ロコロナデ	G縫隙・墨書き	12.3	6.0	6.0	15-4
10 J (K)	土師器	平	ロコロナデ・底部剥離・円錐内面に軽いナマコヘラケズリ	ロコロナデ	G縫隙	14.2	10.0	3.5	15-5
11 K (K)	土師器	平	ロコロナデ・底部剥離・ヘラケズリ、背面整なし	ロコロナデ	G縫隙～体壁 1/3、底端 1/3	14.7	8.0	3.5	15-6
12 L (K)	土師器	平	ロコロナデ・底部剥離・ヘラケズリ、背面丸み	ロコロナデ	G縫隙～体壁 1/5	14.3	8.1	3.7	15-7
13 M (K)	土師器	平	ロコロナデ	ロコロナデ	G縫隙～体壁 1/5	13.0	(無測定)		

第 29 図 SI27 出土遺物 1

## SI35 (第33図)

調査区南東部 F0グリッドに位置する。SI30・P205・P206・P207に切られ、SI29より新しい。北壁と東壁の一部を確認し平面方形と考えられ、東西3.10m以上、南北1.17m以上、軸方位は真北方向である。床面は平坦で黒色粘土層を直床とし、確認面からの深さは0.1mである。カマド・周溝等は確認していない。

## SI36 (第38・39図)

調査区南西部 A3・B2・B3グリッドに位置する。P258・P259に切られている。東壁と北壁及び南壁の一部を確認し平面方形、東西1.00m以上、南北4.42m、軸方位はN $5^{\circ}$ Wである。床面は平坦で貼床を施す。カマドは東壁やや南寄りに構築し、煙道が1.90m突出する。両袖が残存し、内部に土師器甕が逆位に据えられた状態で出土した。甕の内部から土製支脚が立った状態で見つかり、甕は支脚として転用されたものと考えられる。

堆積土やカマドから土師器や須恵器などが出土しており、その中でカマド内から出土した土師器甕1点を図示した。これは小型甕の完存資料で、ロクロで製作され、体部外面はヘラケズリ、体部内面はカキ目で調整されている。こうした特徴は8世紀末から9世紀中頃の甕にみられる。SI36もその頃の年代の可能性が考えられる。この建物跡からは片面にワラ状の圧痕を残す壁土とみられる焼けた粘土が数点見つかっており(写真図版17-3・4、5・6)、壁立ち建物だった可能性が考えられる。焼けた粘土塊はほかの竪穴建物跡からも出土している。

## SI38

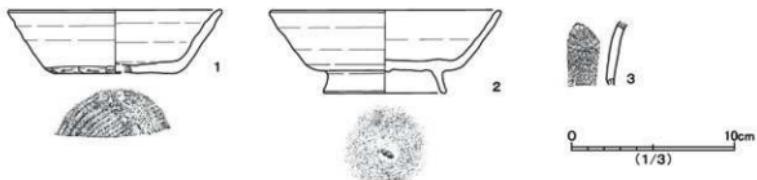
調査区北東部 D11グリッドに位置する。調査は実施していない。P54に切られ、SI09より新しい。南西コーナー部分のみを確認し平面形・規模等は不明である。

## SI39

調査区北東部 E10・E11・F10・F11グリッドに位置する。調査は実施していない。SD02に切られている。北辺と西辺の一部のみ確認し平面形は不明、東西1.00m以上、南北0.40m以上、軸方位はN $33^{\circ}$ Wである。

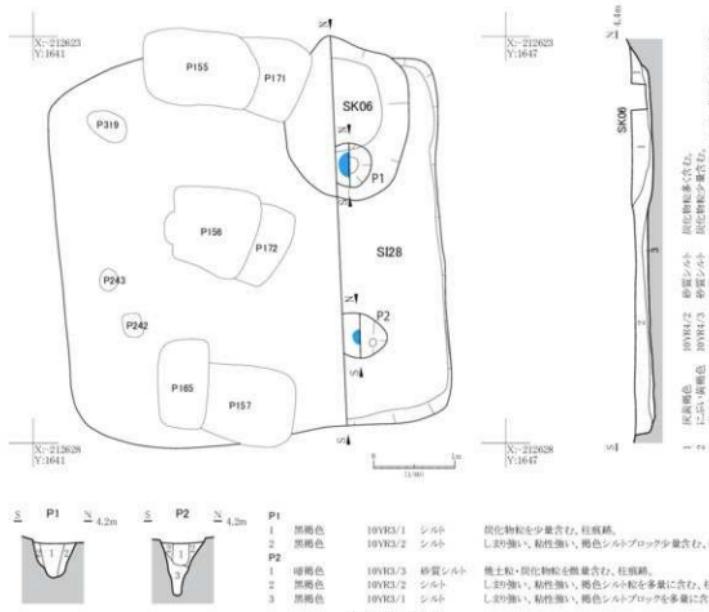
## そのほかの竪穴建物跡の出土遺物(第40図)

土師器や砥石などが出土している。1は有段丸底の土師器壺、2は頸部に段のある土師器甕で、いずれも栗団式に比定されるものである。3は、粒子の細かな凝灰岩とみられる角張った石材の全面に砥磨面、2面に研磨溝があり、仕上げ用の砥石と考えられ。

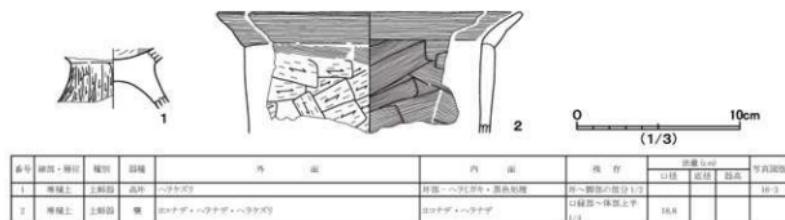


番号	緯度・経度	種別	目録	外　面		内　面		保存	寸法(cm)			写真箇所
				外観	特徴	外観	特徴		上端	中間	下端	
1	A IX. 黏土壺	須恵器	II	ロクロナメ・全体ハラケナメ・底部斜め切欠		ロクロナメ		全体の1/2	13.2	1.5	3.9	SI-4
2	A IX.	須恵器	II	ロクロナメ・高有内輪(本切後に)リクナメ		ロクロナメ		上縁部～底部1/9、 底部1/7	14.2	7.6	5.1	SI-1
3	D IX.	須恵器	III	鏡の心透夜文		ロクロナメ		上縁部下部鏡片				SI-2

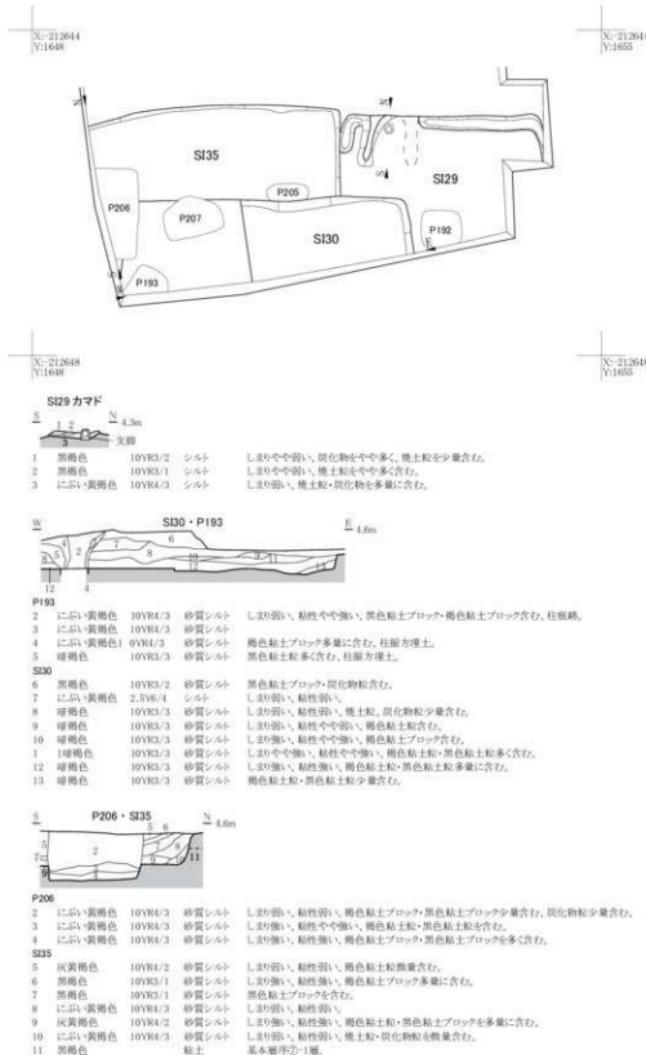
第30図 SI27出土遺物2



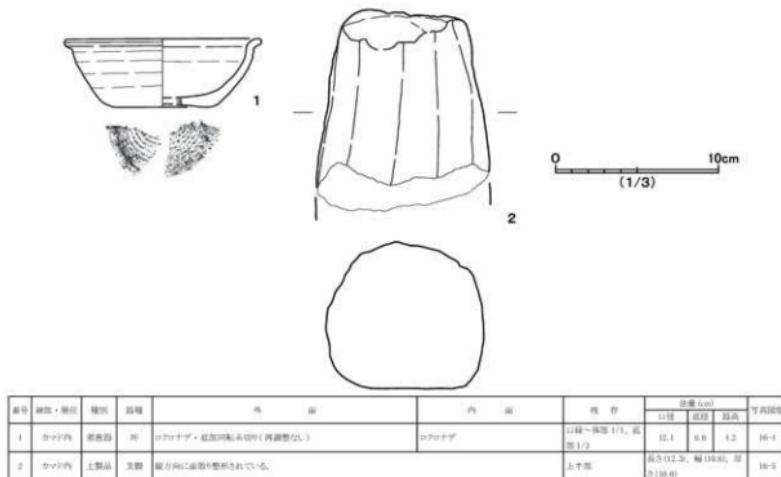
第 31 図 SI28



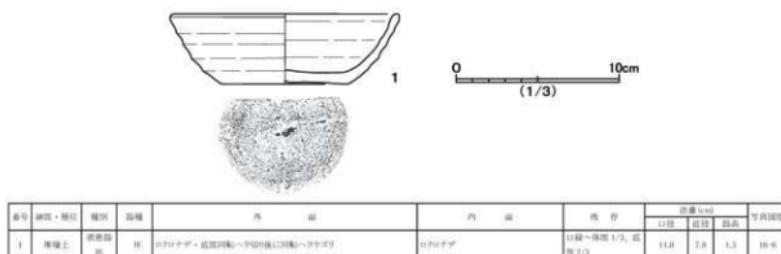
第 32 図 SI28 出土遺物



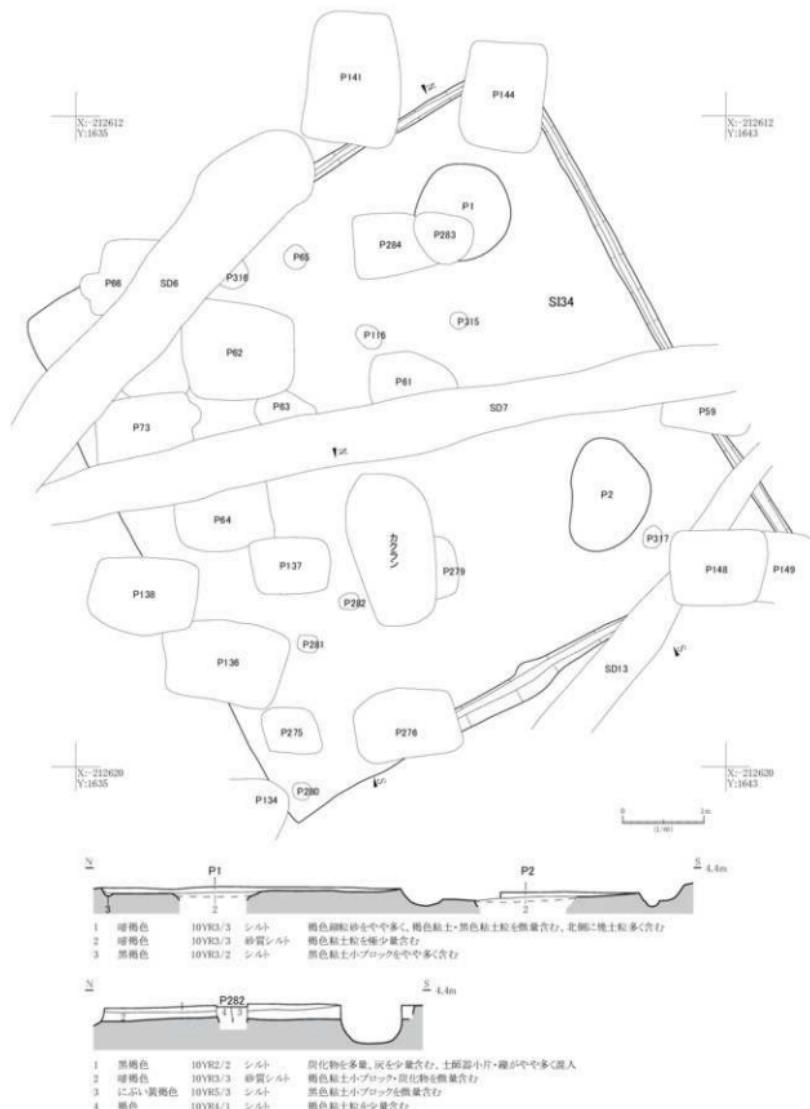
第33図 SI29・SI30・SI35



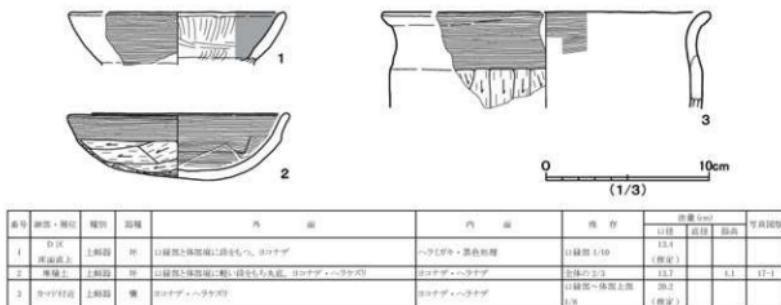
第34図 SI29 出土遺物



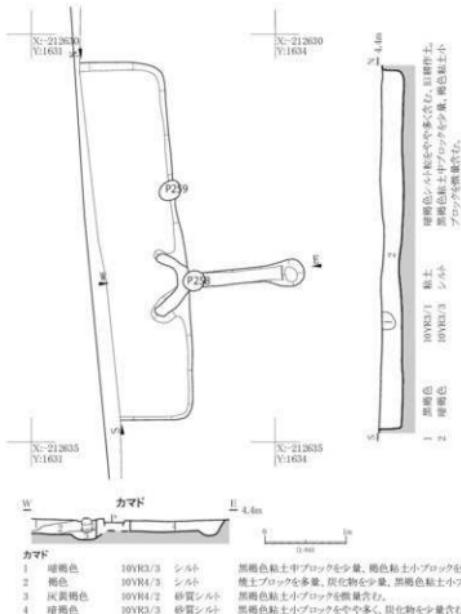
第35図 SI30 出土遺物



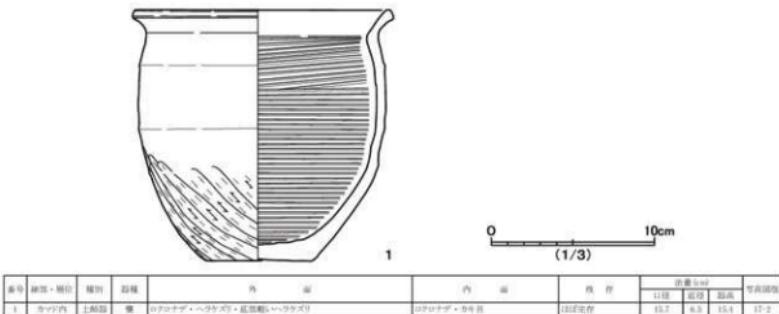
第36図 SI34



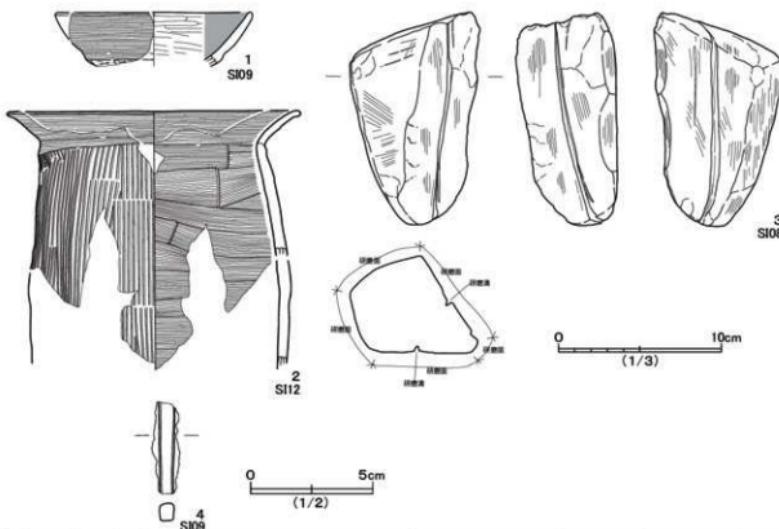
第37図 SI34出土遺物



第38図 SI34



第39図 SI36出土遺物



第40図 その他の堅穴建物跡出土遺物

第2表 穴窓建物跡属性表

遺構名	平面形	座標 (東西×南北, m)	軸方位	床	カマド	柱穴	周溝	出土遺物	備考
SB01	長方形	2.25 × 3.06	N~2° ~W					土師器、瓦製品、	
SB03	方形	6.12 × 6.00	N~17° ~W	部分的に貼床	P1 ~ P5	北壁、西壁	上輪器、須恵器、土製品、瓦製品		
SB05	圓丸方形	12.730 × 4.00	N~2° ~W	貼床		北壁、西壁、南壁	土師器、須恵器、瓦製品	土師器	
SB08	不正方形	3.20 × 5.35	N~2° ~W					土師器、瓦製品	云状溝底でサブトラシモ有
SB09	方形	7.90 × 8.20	N~6° ~W	貼床	北壁			土師器、須恵器、土製品、瓦製品、鉢淨、	
SI11	方形	3.95 × 3.90	N~10° ~W	貼床		P1 ~ P4		土師器	土師器
SI12									土師器
SI13				貼床				土師器	2次溝底でサブトラシモ有
SI14									土師器
SI22	方形	4.06 × (2.10)	N~10° ~W					須恵器	土師器
SI23	方形	(3.80) × (2.70)	N~19° ~W					土師器、須恵器、石製品、瓦製品	土師器
SI24	長方形	3.44 × (1.80)	N~16° ~W	貼床		1		土師器	北側附平
SI27	方形	5.65 × 5.15	N~7° ~W	貼床	P1 ~ P4	北壁西半以外全周	上輪器、須恵器、瓦製品、鉢淨		
SI28	長方形	4.66 × 4.80	N~6° ~W	貼床	P1 ~ P2			土師器	一部調査
SI29		2.50 × (1.60)	N~10°	貼床	北壁西上り	北壁、東壁、西壁	土師器、須恵器、瓦製品	床面のみ	
SI30	方形	3.60 × (1.00)	N~17° ~W	貼床				土師器、須恵器	土師器
SI31	方形	(1.00) × 2.74	N~20° ~W	貼床				土師器、瓦製品	土師器
SI32	方形	3.33 × (1.20)	N~27° ~W					土師器	土師器
SI34	方形	6.07 × 8.88	N~29° ~W	貼床	P1, P2	北壁、南壁、東壁	土師器	一部調査	
SI35	方形	(3.10) × (1.17)	西北	黒色粘土層貼床					
SI36	方形	(1.00) × 4.42	N~5° ~W	貼床	東壁南上り			土師器、須恵器	
SI37		(2.90) × 2.84	N~22° ~W	貼床		1		土師器、須恵器、骨片	
SI38									土師器
SI39		(1.00) × (0.40)	N~33° ~W						土師器

( )は複数で確認できたもの

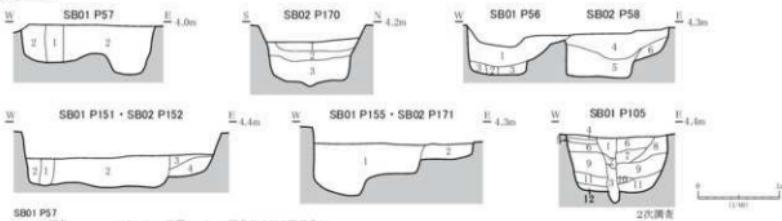
## b. 堀立柱建物跡

## SB01 (第 41 ~ 44 図)

調査区中央部 B 3 ~ B 8・C 3 ~ C 8・D 3 ~ D 8 グリッドに位置する。SB02からの同規模の建て替えである。SI27・SD05・SD06・SD07・SD13 に切られ、SI28・SB02・SA01・SD11 より新しい。南北棟側柱建物跡で、軸方位は N~2° ~W である。桁行 10 間・梁行 3 間、桁行総長 19.76m、梁行総長 6.12m である。西側柱列の各柱間寸法を柱痕跡や柱アタリから計測すると、南西隅柱から北西隅柱へ向かって 2.19m、1.96m、1.93m、1.98m、2.12m、1.83m、1.80m、2.03m、1.92m、2.00m であり、平均 1.976m である。同様に南側柱列の各柱間寸法は 2.20m、1.72m、2.20m であり、平均 2.04m である。柱穴掘方は長方形で大規模である。柱の抜取が部分的に行われている。また身舎内に 2 列の柱列を確認した。この 2 列の柱列は側柱の梁行方向と柱筋が通っており、SB01 に関係する柱列と考えられる。身舎内東柱列は 8 間あり、側柱東柱列から 3.37m、側柱西柱列から 2.24m と梁行方向中央からやや西にずれている。柱穴掘方は方形で側柱より小規模である。身舎内西側柱列は 6 間と推定され、南北に 1 間ずつ短い。側柱西柱列と身舎内東側柱列のおおよそ中间に位置する。柱穴掘方は方形で規模は東側柱列と同等かさらに小さい。この 2 列の柱列が具体的にどのような建物構造を示すものか不明である。

SB01 に関わる柱穴の掘方や柱痕跡からは土師器破片が出土している。これらは全て非クロロで、坏や甕がほとんどである。その中の土師器坏 2 点、須恵器坏と甕各 1 点を図示した。土師器坏は P105 と P139 の掘方から出土したもので、前者は外面中位に段、内面中位に稜をもつものである。後者は有段丸底の坏とみられるが、内面には屈曲はない。須恵器坏は体部との境に段や沈線をもつもので、類例には藤王塙沢北遺跡 1 号住居跡（宮城県教育委員会：1980）や福島県善光寺 2B 号窯跡（東北古代土器研究会：2008）出土の須恵器坏があり、7世紀後葉に位置づけられている。須恵器甕は口縁端部が上方につまみ出される作りのものである。これらの土師器や須恵器は村田 A 編年の 4 段階、7世紀中頃～後半に位置づけられる。これらが全て掘方出土であることから、SB01 の時期の上限を示し、SB01 を切っている SI27 の 8 世紀末から 9 世紀前葉の時期が下限を示すものと考えられる。

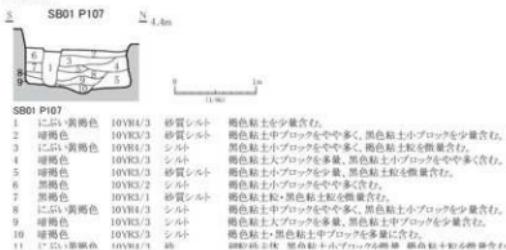
## 東側柱



## 北側柱



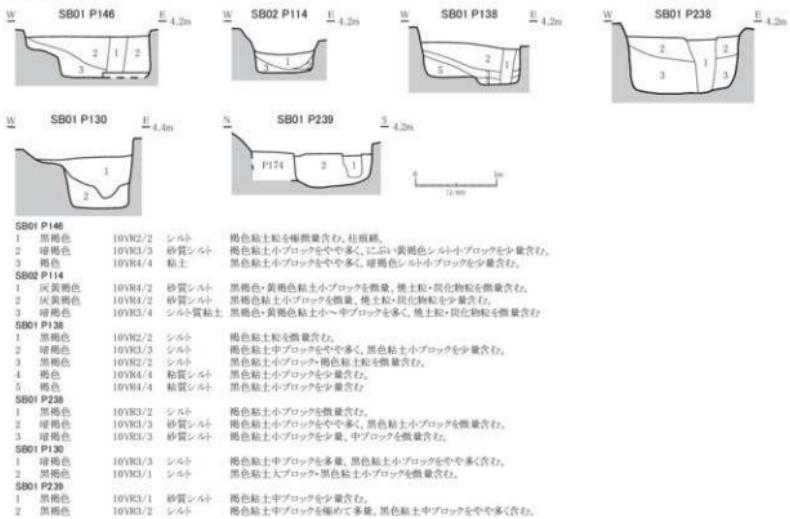
## 南側柱



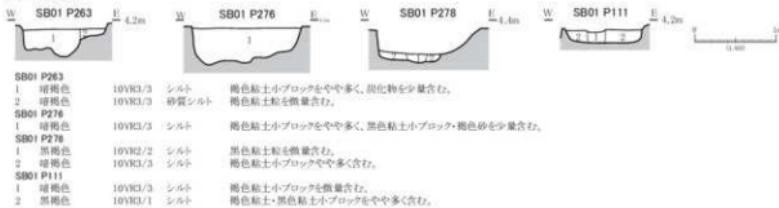
第42図 SB01・02 2

### 第三章 調査成果

#### 西側柱列



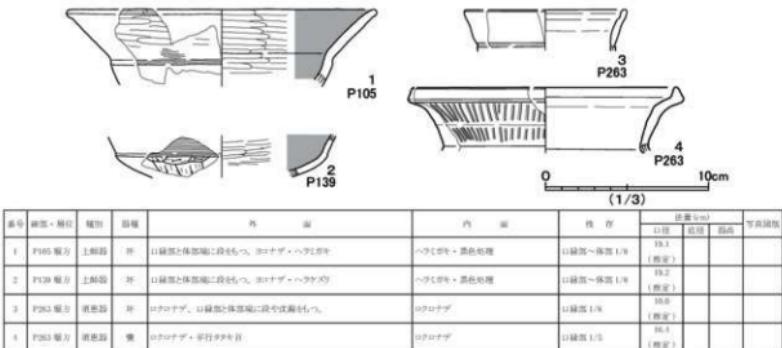
#### 身寄内東柱列



#### 身寄内西柱列



第 43 図 SB01・02 3



第44図 SB01出土遺物

**SB02（第41～43図）**

調査区中央部B3～B8・C3～C8・D3～D8に位置する。同規模の建物跡SB01に建て替えられる。SI27・SB02・SD05・SD06・SD07・SD13に切られ、SI28・SA01・SD11より新しい。南北棟側柱建物跡で、軸方位はN-2°-Eである。桁行10間・梁行3間、桁行総長19.68m、梁行総長6.50mである。西側柱列の各柱間寸法を柱痕跡や柱穴掘方から推測すると、南西隅柱から北西隅柱へ向かって2.09m、2.10m、1.86m、2.09m、1.72m、2.15m、1.92m、1.90m、2.06m、1.77mであり、平均1.966mである。同様に北側柱列の各柱間寸法は1.98m、2.07m、2.45mであり、平均2.16mである。柱穴掘方は長方形で大規模で、ほぼすべての柱が抜き取られている。

SB02に関わる柱穴の掘方や抜き取り穴からは土師器破片が出土している。これらは全て非ロクロの环や塊がほとんどであるが、図示できるような資料はなかった。环には有段丸底の破片も確認されている。

**SB03（第45図）**

調査区南東部FO-F1グリッドに位置する。SD14に切られ、SA01・SD11より新しい。南北棟側柱建物跡で、軸方位は真北方向である。桁行3間・梁行1間、桁行総長5.15m、梁行総長2.72mである。東側柱列の各柱間寸法を柱痕跡から推測すると、南東隅柱から北東隅柱へ向かって1.85m、1.65m、1.65mであり、平均1.716mである。同様に北側柱列の柱間寸法は2.72mである。柱穴掘方はおおむね方形である。

SB03に関わる柱穴からは少量の土師器破片が出土している。これらは全て非ロクロであるが、図示できる資料、時期を確定できるような資料ともなかった。

**SB04（第46図）**

調査区中央部東寄りF3・F4・G3グリッドに位置する。SD11より新しい。建物跡は調査区外東側に伸びるものと考えられ、建物の平面構造・規模等不明である。西柱列の軸方位はN-3°-Eである。南北柱列3間・東西柱列1間分を確認し、南北総長4.19m、東西長1.66m以上である。西柱列の各柱間寸法を柱痕跡から推測すると、南西隅柱から北西隅柱へ向かって1.28m、1.34m、1.57mであり、平均1.396mである。同様に南柱列の各柱間寸法は1.66mである。柱穴掘方は方形である。

SB04に関わる柱穴からは少量の土師器破片が出土している。これらは全て非ロクロであるが、図示できる資料、時期を確定できるような資料ともなかった。

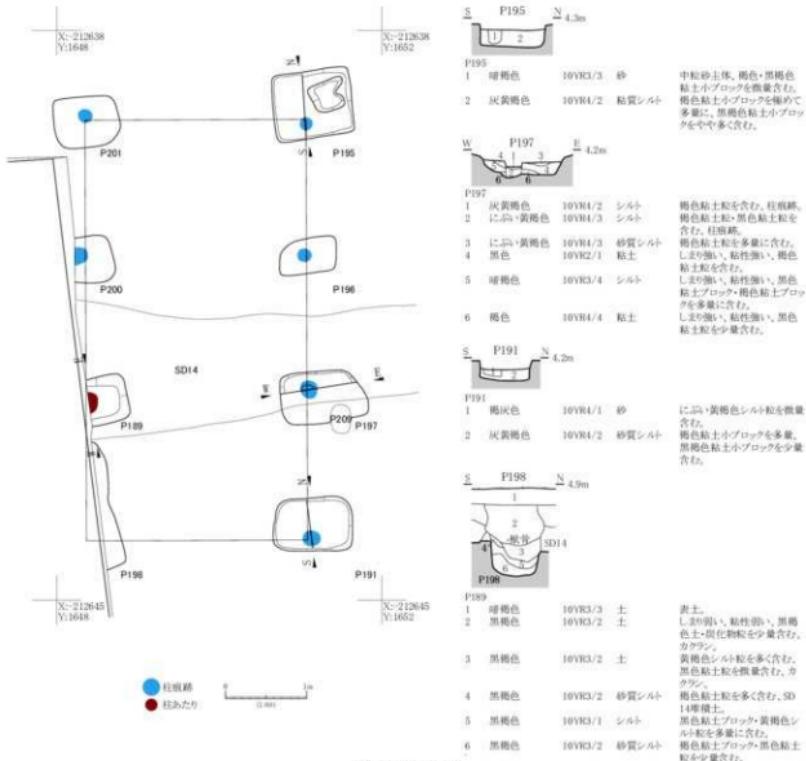
## SB05 (第47図)

調査区北部 C 8・C 9・D 8・D 9グリッドに位置する。SD01・SD05に切られ、SB02より新しい。総柱建物跡で、軸方位は N-5° -Wである。南北2間・東西2間、南北総長 3.40m、東西総長 3.00mである。西側柱列の各柱間寸法を柱痕跡から推測すると、南西隅柱から北西隅柱へ向かって 1.60m、1.80m であり、平均 1.70m である。同様に北側柱列の各柱間寸法は 1.50m、1.50m であり、平均 1.50m である。柱穴掘方は方形で小規模である。全ての柱穴で柱痕跡を確認しただけでなく、5か所で柱アタリを確認した。

SB05 に関わる柱穴からは少量の土師器や須恵器破片が出土している。土師器の多くが非クロであるが、図示できる資料、時期を確定できるような資料ともなかった。

## SB06 (第48図)

調査区中央部東寄り F 6・F 7グリッドに位置する。SB07より新しい。建物跡は調査区外東側に伸びるものと考えられ、建物の平面構造・規模等不明である。西柱列の軸方位は N-7° -Eである。南北柱列4間分を確認し、南北総長 6.13m である。西柱列の各柱間寸法を柱痕跡から推測すると、南西隅柱から北西隅



第45図 SB03

柱へ向かって 3.10m、1.62m、1.41m であり、平均 1.532m である。柱穴掘方は方形もしくは長方形である。

SB06 に関わる柱穴からは少量の土師器や須恵器破片が出土しているが、図示できる資料はなかった。土師器では壺の底部に回転目切り後に手持ちヘラケズリの再調整のあるものが 1 点みられた。

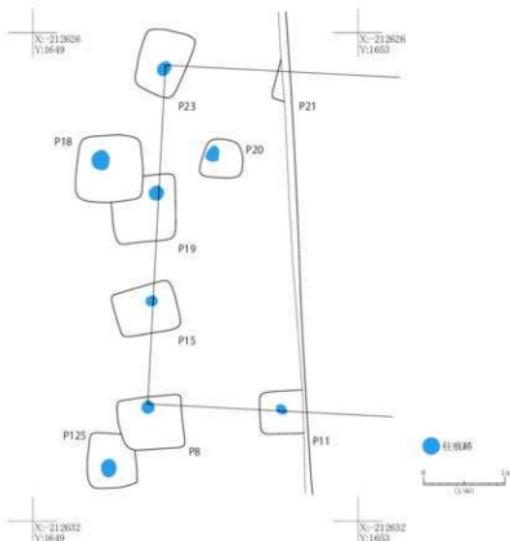
#### SB07 (第 48 図)

調査区中央部東寄り F5・F6 グリッドに位置する。SB08 より新しい。SB08 からの同規模の建て替えと考えられる。建物跡は調査区外東側に伸びるものと考えられ、建物の平面構造・規模等不明であるが、第1次調査の際に確認されている同様な軸方位を持つ柱列と組み合わせ建物を構成する可能性が考えられる。西柱列の軸方位は N-35° -W である。南北柱列 2 間分を確認し、南北総長 5.30m である。柱穴掘方は長方形である。

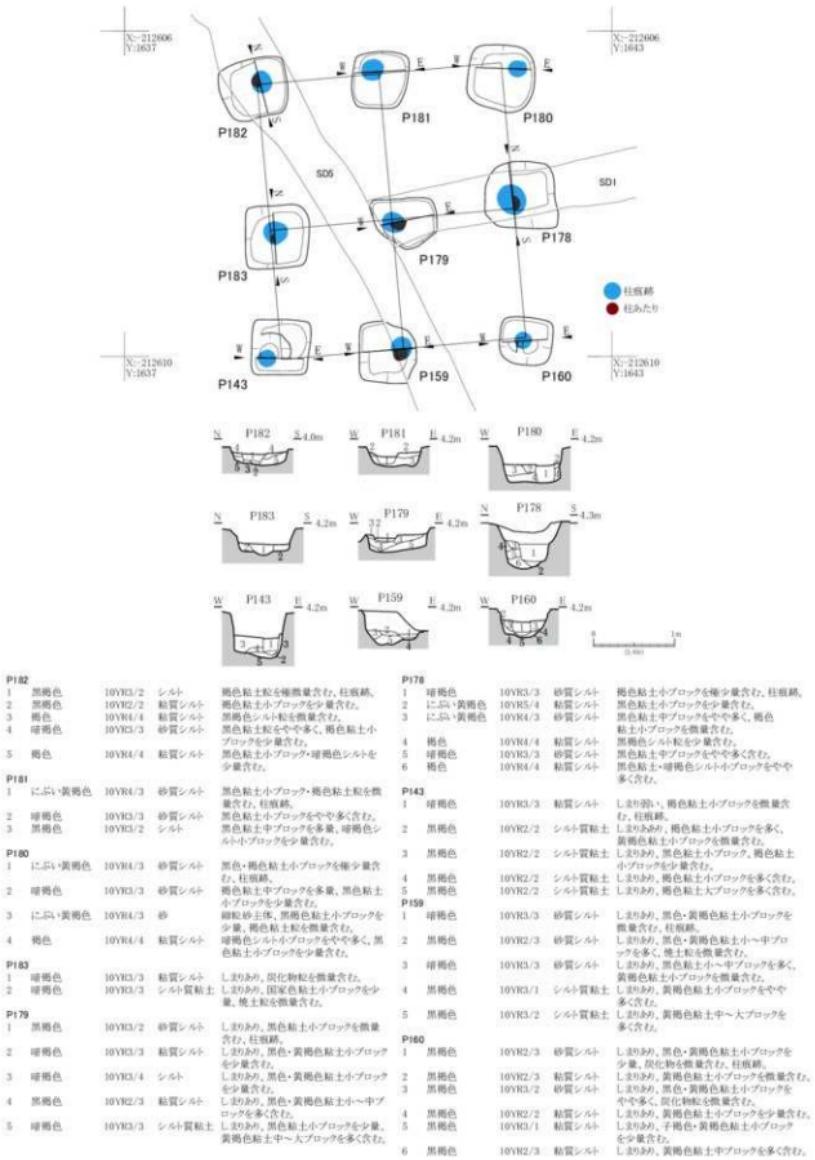
SB07 に関わる柱穴からは非ロクロの土師器破片が少量出土しているのみで、図示できる資料はなかった。

#### SB08 (第 48 図)

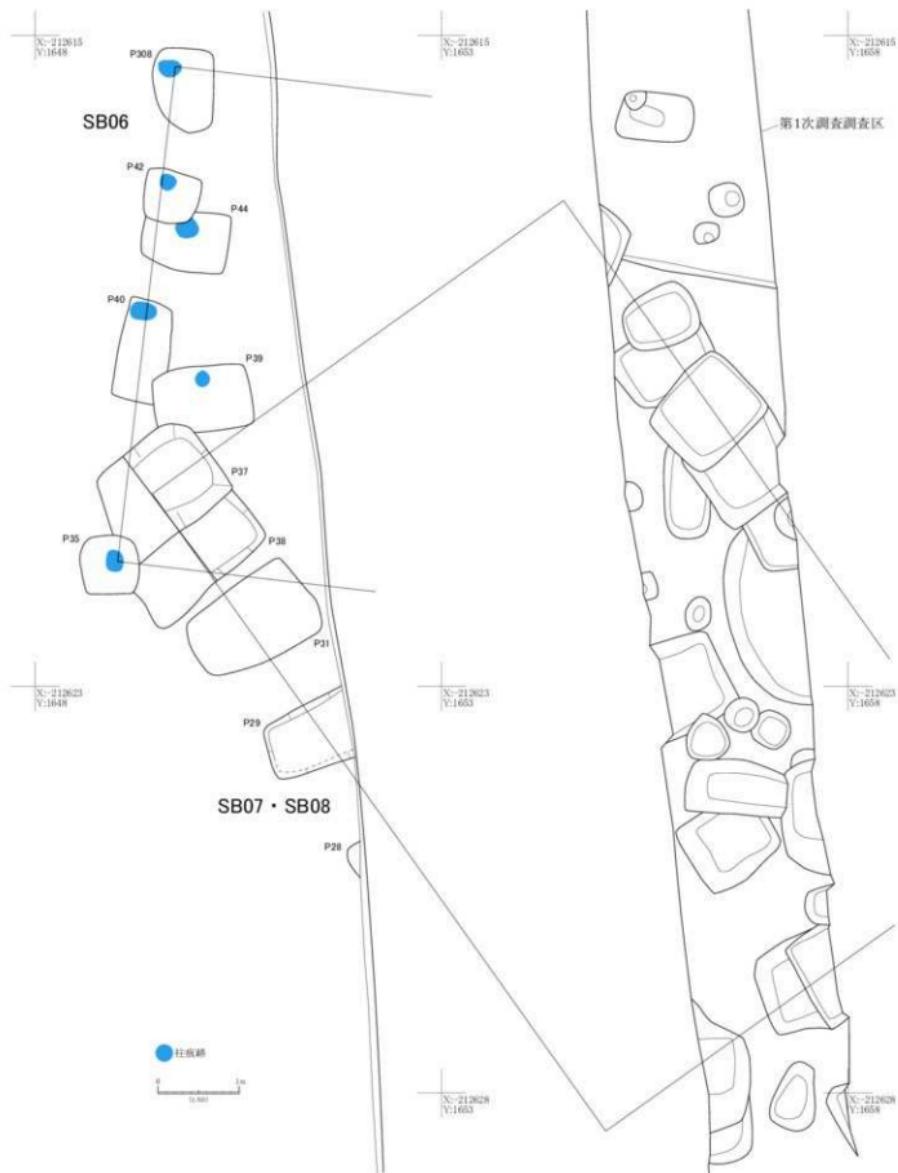
調査区中央部東寄り F5・F6 グリッドに位置する。SB07 に切られている。同規模の建物 SB07 に建て替えられる。建物跡は調査区外東側に伸びるものと考えられ、建物の平面構造・規模等不明であるが、第1次調査の際に確認されている同様な軸方位を持つ柱列と組み合わせて建物を構成する可能性が考えられる。西柱列の軸方位は N-35° -W である。南北柱列 1 間分を確認し、南北総長 3.80m である。柱穴掘方は長方形である。SB08 に関わる柱穴からは出土遺物はなかった。



第 46 図 SB04



第 47 図 SB05



第48図 SB06・SB07・SB08

第3表 挖立柱建物跡属性表

遺構名	規格	標方向	軸方位	前行總長(m)	柱間寸法(m)	梁行總長(m)	柱間寸法(m)	柱穴面形	柱穴規模(m)	柱底直径(m)	備考	
SB01	10	3	南北	N-2°-W	19.76	西側柱列南から 1.96 1.93 1.98 2.12 1.83 1.80 2.03 1.92 2.00 平均1.976	6.12	南側柱列西から 2.20 1.72 2.20 平均2.04	方形、 長方形	0.98 ~ 1.81	0.18 ~ 0.38	SB02 5号の 縦て替え、 身寄 内に2列 の柱列。
SB02	10	3	南北	N-2°-E	19.68	西側柱列南から 2.10 1.86 2.09 1.72 2.15 1.92 1.90 2.06 1.77 平均1.966	6.5	北側柱列西から 1.98 2.07 2.45 平均2.16	方形、 長方形	0.81 ~ 1.68	0.21	
SB03	3	1	南北	真北	5.15	東側柱列南から 1.65 1.65 平均1.716	2.72	北側柱列 2.72	方形、 長方形	0.58 ~ 1.06	0.15 ~ 0.21	
SB04	3	(1) (南北)		N-3°-E	南北總長4.19	西側柱列南から 1.34 1.57 平均1.396	(東西延長1.66)	南側柱列 1.66	方形	0.54 ~ 0.81	0.13 ~ 0.18	
SB05	2	2		N-3°	南北總長3.40	西側柱列南から 1.80 平均1.70	東西延長3.00	北側柱列 1.50 1.50 平均1.50	方形	0.65 ~ 0.90	0.19 ~ 0.36	越社建物
SB06	(4)	(南北)		N-7°-E	(南北延長6.13)	西側柱列南から 1.62 1.41 平均1.532			方形、 長方形	0.69 ~ 1.26	0.20 ~ 0.33	
SB07	(2)	(南北)		N-35°-W	(南北延長5.30)	西側柱列北から 2.00 3.30 平均2.65			長方形	1.55 ~ 1.60		第1次調 査柱穴判 定同一建 物5号。
SB08	(1)	(南北)		N-35°-W	(南北延長3.80)	西側柱列北から 3.05			長方形	1.04 ~ 1.74		第1次調 査柱穴判 定同一建 物5号。

( ) は現況で確認できたもの

### c. 材木跡

#### SA01 (第 49・50 図)

調査区北西から南東方向に延びる材木跡である。調査区中央でクランクして出入口状の構造を有し、北側を SA01 北列、南側を SA01 南列とする。SI27・SI29・SB01・SB02・SB03・SD03・SD05・SD06・SD07・SD13・SD14 に切られている。北列と南列で主軸がややずれるが、軸方位は同一で N-37° -W である。北列北西端から南列南東端までの確認全長は 39.55m、北列の確認全長 16.2m、南列の確認全長 22.15m、出入口部分の幅 1.20m、出入口部分の突出長 2.30m である。掘方は断面逆台形で上幅 0.54m、底幅 0.35m、確認面からの深さ 0.54m である。北列・南列とも全体に材木抜取痕跡が確認でき、北列出入口部では材木の痕跡が明瞭である。材木は直径 0.15 ~ 0.20m の円形で、掘方底面に達しているものと達していないものがある。掘方埋土は黒色粘土を用いている。北列の材木抜取痕跡は掘方の西側によるのに対し南列の材木抜取痕跡は東側によるが、これは北列と南列で掘方主軸にずれがあり、材木列を直線的に設置するためそれぞれ片側に寄せたものと考えられる。また、北列・南列の出入口部における先端は直線部分よりも掘方が大きく掘られ、出入口に2本柱からなる門があつた可能性がある。遺物は出土していない。

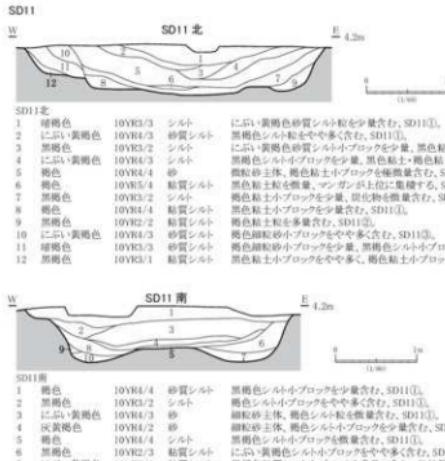
### d. 溝跡

#### SD11 (第 49 ~ 51 図)

調査区北西から南東に延びる溝である。SI28・SI32・SI37・SB01・SB02・SD03・SD05・SD06・SD07・SD13 に切られ、小溝状構造より新しい。軸方位は N-35° -W、やや屈曲した北部で N-47° -W である。確認全長 36.6m、断面逆台形で、上幅 3.29 ~ 3.68m、底幅 2.40 ~ 2.62m、確認面からの深さは 0.62 ~ 0.66m である。埋土の観察では3時期の溝が存在することがうかがえる。1期と2期の溝は新旧関係不明だが

それぞれ西側、東側によつた位置に掘削している。3期の溝は幅広く、底面は平坦である。

堆積土から非ロクロの土師器が出土しており、図示できたのはその中の甕1点である。これは堆積土の下層から出土しており、溝が機能した古い段階のものである。底部破片で、外面はヘラケズリで整形されている。このほかに図示できなかつたが、無底の甕が出土している。同一個体とみられる口縁部はくびれが緩く、頭部に段がわざかに付くものである。



第50図 SA01・SD11 2



番号	断面	横断	断面	外 面	内 面	底面	出露 (cm)	写真範囲
1	堆積土	上部	偏	ハラケズリ・直面テラ	△フナゲ	底面	10cm	6.8

第51図 SD11 出土遺物

第4表 材木跡跡属性表

造構名	規模		出入口部	輪方位	断面		材木	備考
	確認全長 (m)	北側確認全長 (m)	南側確認全長 (m)	幅 (m)	奥深 (m)	断面形		
SA01	39.55	14.2	22.15	1.2	2.3	N~S7°~W	逆走形 0.54 0.35 円形 0.15~0.20	出入口部に門か

#### SD01（第 52・53 図）

調査区北東部 D 9・E 9・F 9 グリッドに位置する東西溝である。SD05 に切られ、SI03・SI8・SI9・SD2 より新しい。やや屈曲しており西半の軸方位は N-80° -E、東半は N-94° -E である。確認長 9.90m、断面逆台形で、上幅 0.5 ~ 0.9m、底幅 0.3 ~ 0.6m、確認面からの深さは 0.1 ~ 0.16m である。第2次調査1トレンチ東壁の観察では、基本層序④層を掘り込み、埋土上部に十和田 a 火山灰を含むことが確認されている。堆積土から非ロクロの土師器が出土しているが、図示はできなかった。

#### SD02（第 52・53 図）

調査区北東部 E 9・E10・E11・F 9 グリッドに位置する南北溝である。SD01 に切られ、SI03・SI09・SI39・P297・SK09 より新しい。南端部は北東方向へ屈曲する。直線部分の軸方位は N-6° -W である。確認長 11.4m、断面皿形で、上幅 0.8m、確認面からの深さは 0.23m である。第2次調査では須恵器が多数出土し、底部に墨書「方」の描かれた坏が出土している。

#### SD03・SD07（第 52・53 図）

調査区中央部に位置するコの字状の溝である。SD05・SD06・SD13 に切られ、SI03・SB01・SB02・SA01・SD11 より新しい。軸方位は北辺で N-78° -E、南辺で N-74° -E、東辺で N-5° -W である。確認全長は 52.7m、北辺 16.5m、南辺 16.9m、東辺 19.3m である。断面皿型で上幅 0.5 ~ 0.75m、確認面からの深さは 0.15m である。

SD 03 の堆積土から土師器や須恵器、鉄滓などが出土しているが、図示はできなかった。土師器には非ロクロとロクロがあり、須恵器には坏底部が回転ヘラ切りのものがある。

SD 07 の堆積土から土師器や須恵器などが出土しているが、図示はできなかった。土師器には非ロクロとロクロがある。

#### SD05（第 52・53 図）

調査区北部に位置する L 字状の溝である。SD013 に切られ、SI12・SB01・SB02・SB05・SA01・SD07・SD11 より新しい。南北辺の軸方位は N-27° -W、東西辺の軸方位は N-64° -E である。確認全長 37.7m、南北辺長 22.2m、東西辺長 15.7m、断面深皿形で、上幅 0.4 ~ 1.0m、確認面からの深さは 0.19 ~ 0.25m である。

堆積土から土師器や須恵器破片が比較的多く出土しており、その中の土師器1点を図示した。これはロクロで製作された坏で、底部は回転糸切り後に手持ちヘラケズリが施されている。そのほかの土師器には非ロクロとロクロの両者がみられた。

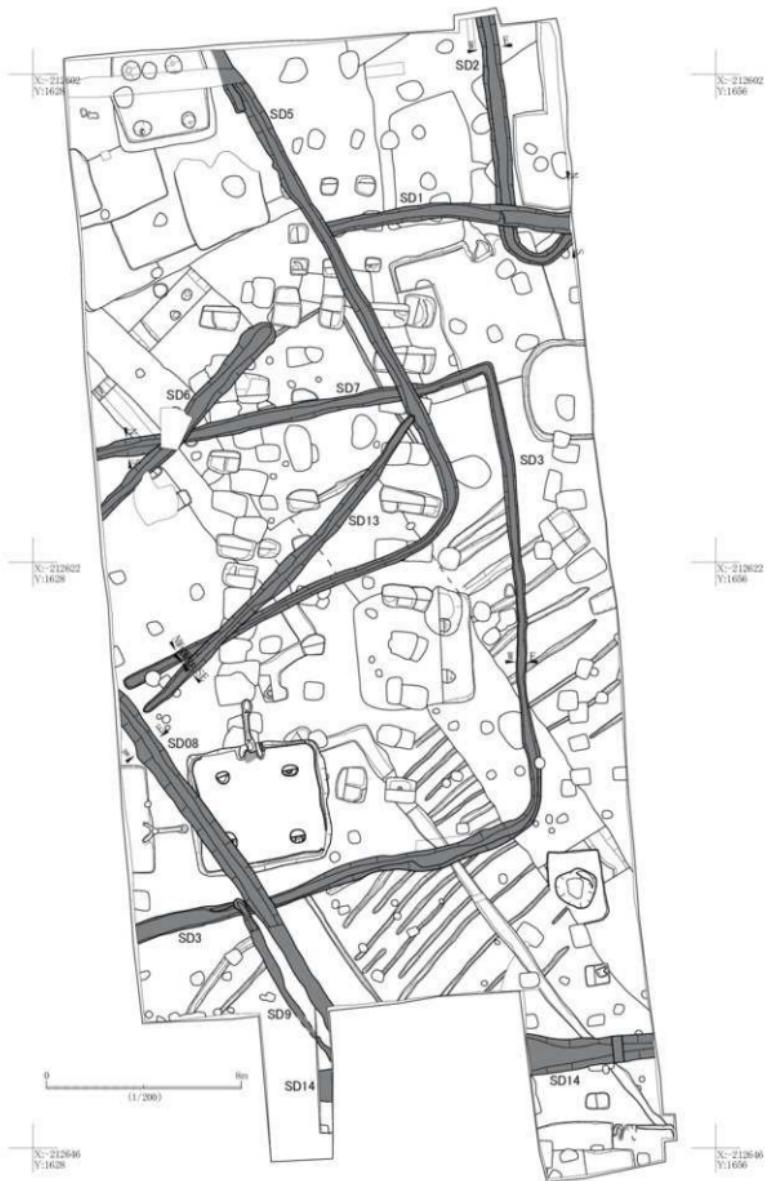
#### SD06（第 52・54 図）

調査区中央部北寄り A 6・B 7・C 8 グリッドに位置する北東 - 南西溝である。SI34・SB01・SB02・SA01・SD11 より新しい。軸方位は N-42° -E、確認全長 10.6m、断面逆台形で、上幅 0.55 ~ 1.15m、底幅 0.2 ~ 0.42m 確認面からの深さは 0.03 ~ 0.27m である。

堆積土から土師器や須恵器、羽口、鉄製の釣針などが出土しており、その中の須恵器、羽口、釣針それぞれ1点を図示した。須恵器は縫の口縁部下半とみられ、細かな波状文が施されている。底部は回転糸切り後に手持ちヘラケズリが施されている。そのほかの土師器には非ロクロとロクロの両者がみられた。

#### SD08（第 52・53 図）

調査区南西部 A 4・B 3・B 4・C 1・C 2 グリッドに位置する北西 - 南東溝である。SI27・SB01・SB02・SD03 より新しい。軸方位は N-34° -E、確認全長 16.4m、断面深皿形で、上幅 0.55 ~ 1.06m、確認面か



第52図 溝跡 1

らの深さは0.17～0.36mである。

堆積土から土師器が出土しているが、図示はできなかつた。土師器は非クロコが多くつた。

#### SD09（第52図）

調査区南西部C1・C2グリッドに位置する北西-南東溝である。SD03・SD15・SD16より新しい。軸方位はN-28°-W、確認全長12.3m、断面皿形で、上幅0.2～0.4m、確認面からの深さは0.04～0.20mである。

#### SD13（第52・53図）

調査区中央部B4・B5・C5・C6・D6・D7グリッドに位置する北東-南西溝である。SB01・SB02・SA01・SD05・SD11より新しい。軸方位はN-42°-E、確認全長16.2m、断面深皿形で、上幅0.49～0.85m、確認面からの深さは0.22mである。

堆積土から土師器や須恵器が出土しているが、図示はできなかつた。

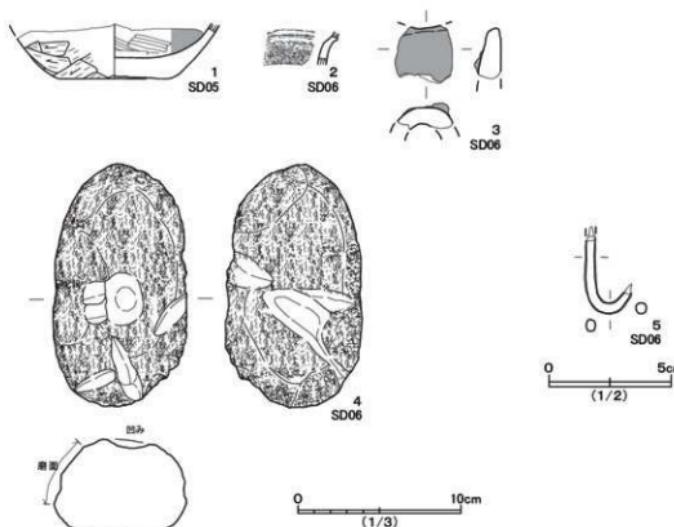
#### SD14（第52・54図）

調査区南部C0・D0・F0・F1・G0・G1グリッドに位置する東西溝である。SB03・SA01より新しい。軸方位はN-84°-E、確認全長13.9m、断面逆台形で、上幅1.0～1.8m、底幅0.2～1.4m、確認面からの深さは0.11～0.23mである。

堆積土から土師器や須恵器、陶石が出土しており、その中の陶石1点を図示した。これは陶みだけではなく、線条痕や磨面も確認される。



第53図 溝跡 2



番号	断面・形状	建物	遺物	外 面		性 状	出土量 (ml)	日付	高さ	参考
				幅 (m)	厚さ (m)					
1 SD05 壁面土	上端部 直線	井	コロナデ・ハラケツリ、底部同斜面切り出しに手附もハラケツリ	△～△	0.9	△～△	△～△	△～△	3.2	
2 SD06 壁面土	直線部 直線	直線	△～△	△～△	0.8	△～△	△～△	△～△	0.23	△～△
3 SD06 上部品 壁面土	直線部 直線	外縁に沿解剖行有	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△
4 SD11 石製品 壁面土	円柱 直線	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△
5 SD06 竹製品 壁面土	直線 △	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△	△～△

第54図 溝跡出土遺物

## 第5表 溝跡属性表

遺構名	方 向	軸方位	規 格			断面形	出土遺物	備 考
			確認長 (m)	上幅 (m)	底幅 (m)			
SD01 南北	東西	N-80° E, N-94° E	9.9	0.5 ~ 0.9	0.3 ~ 0.6	0.1 ~ 0.16	断面直 土師器	
SD02	南北	N-6° -W	11.4	0.8		0.23	直型 土師器、瓦	
SD03 + SD07 二字状	北切 N-78° E, 南切 N-74° E	-E, 東切 N-5° -W	32.7	0.5 ~ 0.75		0.15	直型 土師器、瓦、漆	
SD05 南北	東西	N-27° -W, 東西 N-64° -E	37.7	0.4 ~ 1.0		0.19 ~ 0.25	深垂型 土師器、瓦器	
SD06 北東 - 南西	北東	N-42° -E	10.6	0.55 ~ 1.15	0.2 ~ 0.42	0.03 ~ 0.27	断面直 土師器、瓦器、上部品、石製品	
SD08 北西 - 南東	北西	N-34° -W	16.4	0.55 ~ 1.06		0.17 ~ 0.36	直型 土師器	
SD09 北西 - 南東	北西	N-28° -W	12.3	0.2 ~ 0.4		0.04 ~ 0.20	直型 土師器	
SD11 北東 - 南西	北東	N-35° -W, N-47° -W	26.6	3.29 ~ 3.68	2.40 ~ 2.62	0.62 ~ 0.66	直型 土師器	3時期3-4
SD13 北東 - 南西	北東	N-42° -E	16.2	0.49 ~ 0.85		0.22	直型 土師器、瓦器	
SD14 東西	東西	N-83° -E	13.9	1.0 ~ 1.8	0.2 ~ 1.4	0.32	直型 土師器、瓦器、石製品	

e. 小溝状遺構群

小溝状遺構群（第 55 ~ 57 図）

調査区中南東部 D 1・D 2・E 1～E 6・F1～F 6グリッドに畝間跡と考えられる小溝状遺構群を確認した。基本層序VI層上面で確認できたが、より正確に把握するため基本層序VII層上面まで下げて平面形を確認した。本調査で確認した遺構のなかで最も古い遺構群である。南西 - 北東に延びる溝状遺構が 20 本並行して存在し、軸方位は N-55° - E である。溝幅は 0.2 ~ 0.55m、確認面からの深さは 0.07 ~ 0.10m である。南西端は直行する溝 SD10 を超えることはなく、SD10 は畑の境界溝として機能したものと考えられる。小溝状遺構群は SD10 を起点にすると南西 - 北東 16.5m、北西 - 南東 17.2m の範囲に認められ、畑の区画単位を示している可能性がある。

2条の堆積土から非ロクロの土師器が出土している。その中の1点を図示した。これは⑩の溝状遺構堆積土から出土した高壙壺部である。特徴から古墳時代中期の南小泉式に比定されるものと考えられる。

f. 土 坑

SK04（第 58・59 図）

調査区南東部 F 2グリッドに位置する。SI01・SD11 より新しい。平面不正円形、東西 1.68m、南北 1.64m、断面皿型で確認面からの深さ 0.27m である。

堆積土から土師器が出土しており、その中の4点を図示した。これらは全てロクロで製作されている。1と2は壺で、1の体部下端から底部は手持ちヘラケズリで再調整されている。3と4は鉄鉢形で口縁部が内寄する丸底の鉢とみられ、口縁端部がわずかに肥厚する。3は外面は回転と手持ちのヘラケズリが施され、内面は丁寧なヘラミガキ後に黒色処理されている。4は破片から復元した図で、3と違い胎土が緻密な上に焼成も極めて良く、色調が橙色を呈する。外面はカキ目で整形されており、体部下半には黒色の付着物が認められる。このような鉄鉢形の土器は鉄鉢を模倣して土師器や須恵器で製作されたもので、栗原市教育委員会の安達訓仁氏によると県内では約 20 点の出土例があるという。その半数以上が須恵器であり、時期的には 8 世紀から 9 世紀頃のものが多いようである。鉄鉢は僧侶の食器や寺院での供養具の、いわゆる仏具として用いられたと考えられており、付近に仏教施設の存在も想定される。SK04 から出土した土師器は特徴から 9 世紀前葉から中葉にかけてのものと考えられる。SK04 の時期もその頃に位置づけられる。

SK06

調査区中央部 E 5グリッドに位置する。SI28 より新しい。確認面で認識できず、SI28 調査時に断面で確認した。平面不正円形、東西推定 1.50m、南北推定 2.0m、断面皿型で確認面からの深さ 0.23m である。

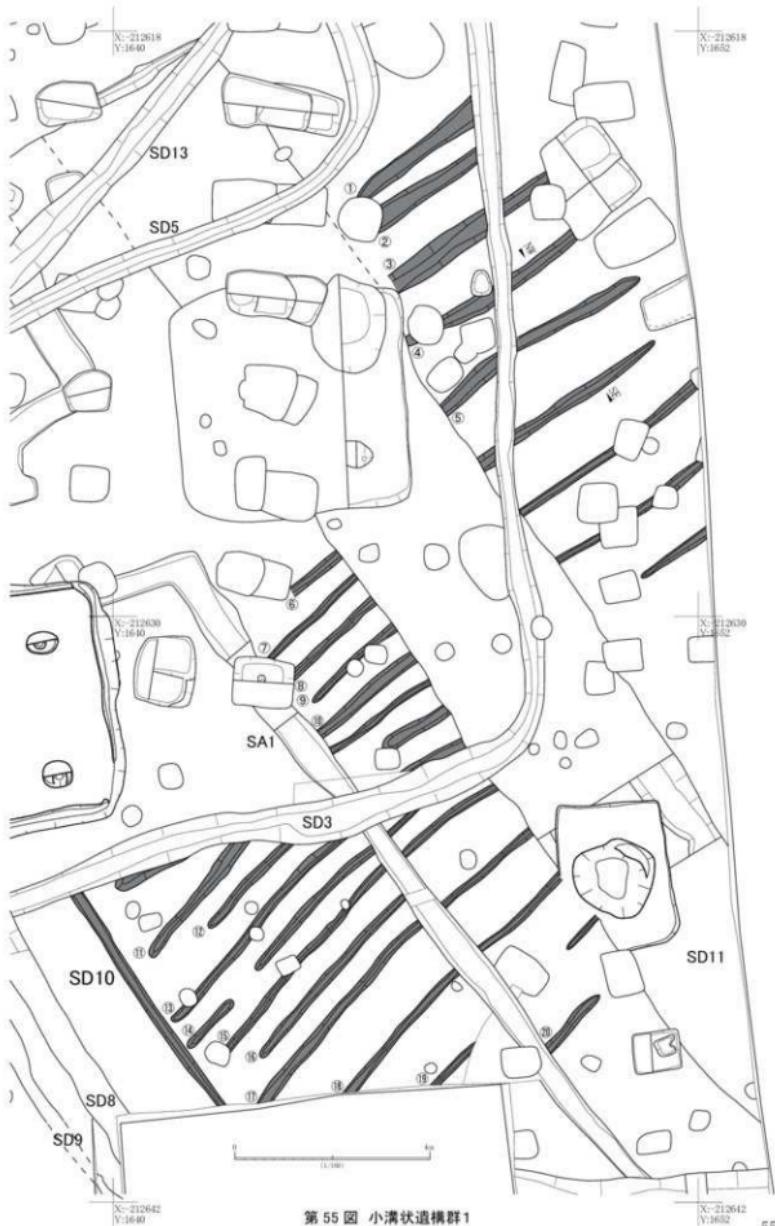
堆積土から土師器が出土しているが、図示はできなかった。

g. 性格不明遺構

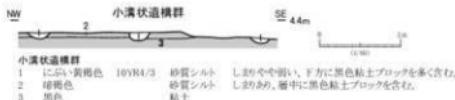
SX02（第 60・61 図）

調査区中央部東寄り E 5グリッドに位置する。小溝遺構群より新しい。遺構確認作業中に高い位置で焼土とそこに含まれる土器を確認した。平面楕円形、東西 0.43m、南北 0.53m、断面皿型で確認面からの深さ 0.08m である。堅穴住居跡のカマド残欠とも考えられるが詳細は不明である。

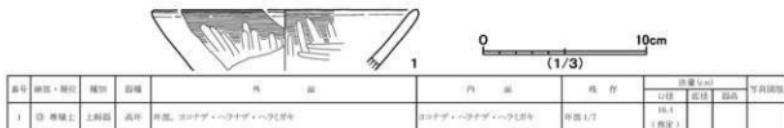
堆積土中から図示した土師器甕が1点出土している。この甕は頭部に段をもたず、口縁部が緩やかに外反するもので、住社式に相当し、村田A編年の2段階、6世紀後半頃に位置づけられるものと推測される。



第55図 小溝状造構群1



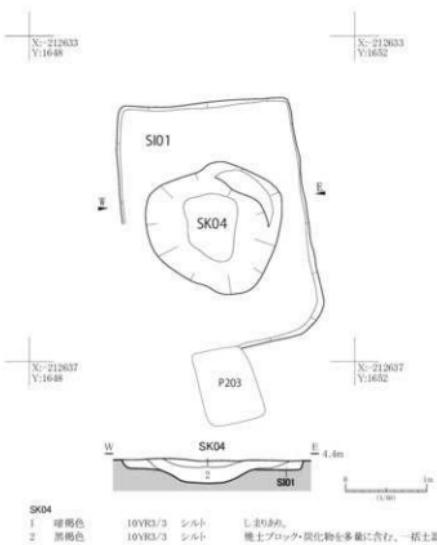
第56図 小溝状造構群2



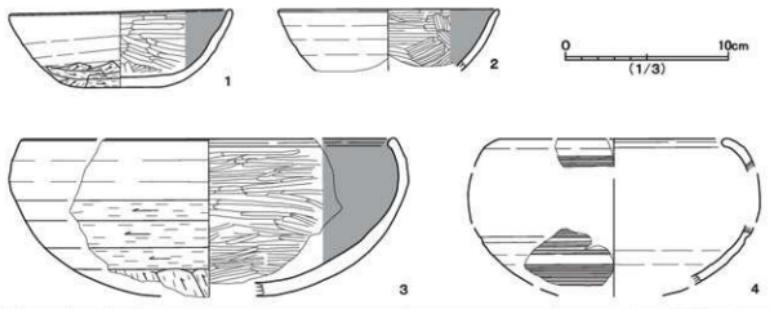
第57図 小溝状造構群出土遺物

第6表 小溝状造構群属性表

数 量	方 向	軸方位	範 囲	廣 幅	深 度	出 土 遺 物	備 考
20	北東-南西	N:55° E	16.5 × 17.2	0.2 ~ 0.55	0.07 ~ 0.10	土師器	SD10は境界標示

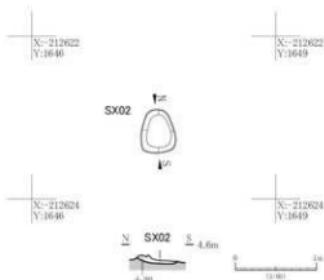


第58図 SK04



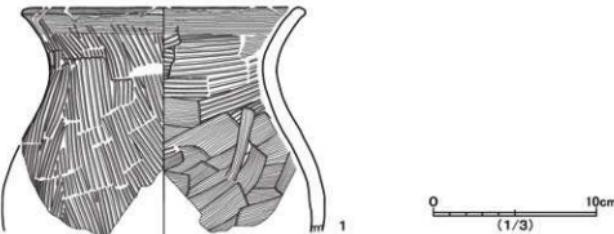
第59図 SK04出土遺物

番号	縦断・横断	種別	目録	外　面	内　面	保存	重量(cm)			写真図版
							以降	既得	既古	
1	堆積土	土器器	井	ロコナダ・ハラビリ・手持ちハラビリ	ハクシガキ・黑色処理	II層部～体部3/5、底部1/1	13.8	3.6	4.8	19-4
2	堆積土	土器器	井	ロコナダ	ハクシガキ・黑色処理	II層部1/2、体部1/1	13.8			
3	堆積土	土器器	井	ロコナダ・凹輪・手持ちハラビリ	ハクシガキ・黑色処理	全体の1/1	22.9	9.2	19-1	
4	堆積土	土器器	井	ロコナダ・カキ舟 体部下半に黑色付着物 (既古化)	ロコナダ	II層部と体部破片 (既定)	13.8			



SX02  
1 堆積色 10YR3/3 砂質シルト 硬化物・焼土粒を多量に含む。土器器片を嵌入する。

第60図 SX02



第61図 SX02出土遺物

番号	縦断・横断	種別	目録	外　面	内　面	保存	重量(cm)			写真図版
							以降	既得	既古	
1	堆積土	土器器	井	ロコナダ・ハラメ	ロコナダ・ハラメ・ハラナ	II層部～体部1/10 (既定)	17.4			

第7表 土坑属性表

遺構名	平面形	規 格	出土遺物	備 考
SK04	不正円形	1.68 × 1.64 × 0.27	土師器	
SN02	椭円形	0.53 × 0.43 × 0.08	土師器	炭化物・植土多量含む

#### h. その他の出土遺物（第62・63図）

上述の遺構出土の遺物のほかに、掘立柱建物跡の柱穴とは認定できなかったビットや基本層から、また遺構精査（プラン確認）時、機械掘削時などに出土した遺物がある。

遺物には土師器や須恵器、弥生土器、近世以降の陶器・磁器、焼けた粘土塊、鉄製品、製鉄関連の羽口や炉壁、古錢、磨石とみられる石製品がある。それらの中で土師器12点、須恵器7点、弥生土器4点を図示した。以下では特記すべき点のみを述べる。

土師器の第62図1・2・7は基本層V層の砂層中から出土した。1・2は壺で、1は底部が丸底で、口縁部が短くくびれて外反するものである。2は丸底扁平底で、体部が外傾し口縁部が軽くくびれるものである。7は高环脚部で、円錐状に開き裾部で大きく広がる形態とみられる。これらの類例には仙台市南小泉遺跡第25次調査SD5の一括土器などがあり、古墳時代中期の広義の南小泉式でも前段階、藤澤 敦氏編年（藤澤:1992）の第2段階（狭義の南小泉式）に相当する。時期的には5世紀中葉前後のものと考えられる。6と8の高环脚部もほぼ同時期のものと考えられる。これらは古代以前の基本層の時期を示す貴重な資料といえる。

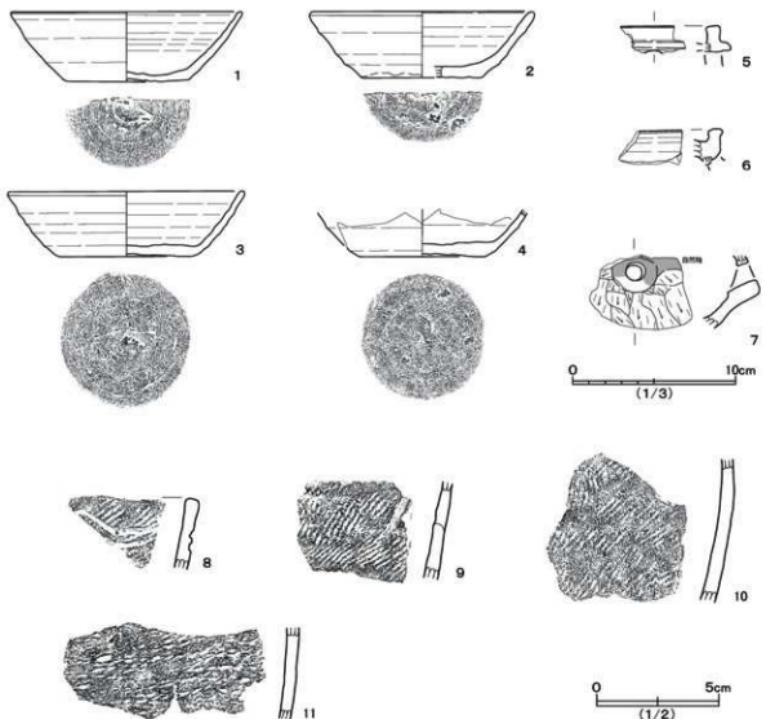
須恵器の第63図5・6は円面鏡の外堤部の一部とみられ、両者とも透かしが確認される。円面鏡は1次、2次調査でも数点ずつ出土している。須恵器の第63図7は罐の注口部である。自然釉が掛かり胎土が緻密で、東海地方の湖西産のものと考えられる。

第63図8～11は弥生土器の深鉢の破片とみられ、口縁部の8の外面には地文上にスジ状の痕跡が付く施文具で沈線が施されている。時期は確定できないが、中期後半から後期頃のものと推定される。これらの弥生土器は保存状況から他地からの移動というよりは現地性の高いものと考えられ、付近に居住域の存在が想定される。なお、弥生時代関係では第1次調査で石庖丁が1点出土している。



番号	出土遺物 ・部位	種別	記号	外 面		内 面	性 種	法 庫 (cm)			写真位置
				山 横	山 縦			山 横	山 縦	山 縦	
1	石 基本形 凸V砂輪	上輪器	井	ヨコナギ・ヘラケヅリ・ヘラヒカリ		ヨコナギ・ヘラヒカリ	一面のみ欠損	12.0	4.5	19.2	
2	石 基本形 凹V砂輪	上輪器	井	ヨコナギ・ヘラケヅリ・ヘラヒカリ・底部ヘラケヅリ		ヨコナギ・ヘラヒカリ	全体の1/2	13.7	5.0	3.6	
3	陶輪器削合	上輪器	井	口縁部十字割面に斜め矢状溝、ヨコナギ・ヘラケヅリ		ヘラケヅリ	全体の1/2	10.8	3.1	19.3	
4	陶輪器削合	上輪器	井	ヨコナギ・直角斜面切切り(両調整なし)		ヘラヒカリ・墨色処理	口縁部・1/2、体側へ 直角1/4	13.2	5.4	19.1	
5	石 基本形 凸V砂輪	上輪器	井	ヨコナギ・直角斜面切切り(両調整なし)		ヘラヒカリ・墨色処理	口縁へ斜面1/4、直 角1/4	12.0	4.4	4.0	
6	陶輪器削合	上輪器	井	ヨコナギ・直角斜面切切り(両調整なし)		ヨコナギ・オキニル・ヨコナギ	側面上下1/4			19.0	
7	石 基本形 凸V・凹V砂	上輪器	井	ヨコナギ・ヨコナギ		ヨコナギ・ヘラケヅリ・ヨコナギ	側面上下1/4				
8	陶輪器削合	上輪器	井	ヨコナギ・ヘラヒカリ・ヨコナギ、赤褐色(焼成面)		ヘラケヅリ・ヘラヒカリ	側面上下1/4				19.0
9	F900 製作	上輪器	井	ヨコナギ・ヘラナギ		ヨコナギ・ヘラナギ	口縁部へ体側上半 1/4	22.0	7.0	(推定)	
10	陶輪器削合	上輪器	井	ヘラケヅリ・ヨコナギ・ヘラケヅリ・直角不明		ヘラケヅリ	側面下半1/4			19.0	
11	陶輪器削合	上輪器	井	ヨコナギ		ヨコナギ	口縁部1/4				
12	陶輪器削合	上輪器	井	ヨコナギ・平行クラク日		ヨコナギ	口縁部へ体側上半 1/4	22.0	7.0	(推定)	

第 62 図 その他の出土遺物 1



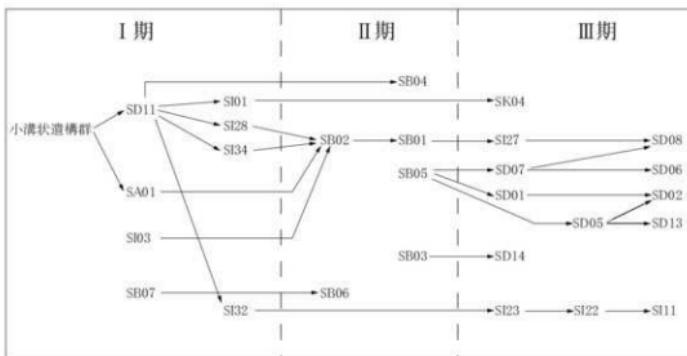
番号	出土経緯 ・地区	種類	表面	内面	残存	寸法 (cm)			写真箇所
						上幅	底径	高さ	
1	機械掘削中 ・田原町	漆器底	平、ロクロナデ・直並列縞へ9回目(表面整なし)	ロクロナデ	山継続1/1L、深幅 ～底径1/2	14.2	8.8	19.7	
2	機械掘削中 ・田原町	漆器底	平、ロクロナデ・直並列縞へ9回目(表面整なし)	ロクロナデ	山継続～底径1/2、 縦縞	13.8	7.1	4.1	
3	機械掘削中 ・田原町	漆器底	ロクロナデ・直並列縞へ9回目(表面整なし)～サケズ	ロクロナデ	山継続～底径1/2、 底幅1/3	14.5	8	4.8	
4	C1 槍矢生中 ・田原町	漆器底	ロクロナデ・直並列縞へ9回目(表面整なし)	ロクロナデ	体幅1/10、底幅1/1			7.7	
5	C9 槍矢生中 ・田原町	漆器底	円錐形 内壁、外壁、底面、口縁に小凹みあれど、ロクロナデ	ロクロナデ	内壁底縫片				
6	槍矢生中 ・田原町	漆器底	円錐形 内壁、外壁、底面、口縁に小凹みあれど、ロクロナデ	ロクロナデ	内壁底縫片				
7	機械掘削中 ・田原町	漆器底	ハラクズ、自然脚が根柢なし	ロクロナデ	所10の部分			30.2	
F13F,G1 (G1 積生中)	発生上 部	漆器	漆器(?) 朱漆文(朱漆文か)	《がき》	山継続縫片			20-3	
F13F,G1 (G1 積生中)	発生上 部	漆器	漆器(?) 朱漆文	ヘラナデ	漆器縫片			20-4	
F13F,G1 (G1 積生中)	発生上 部	漆器	漆器(?) 朱漆文	ヘラナデ。全面にコグ付着	漆器縫片			20-5	
11	P10B	漆生上 部	漆器文	ヘラナデ	漆器縫片			20-6	

第 63 図 その他の出土遺物2

## 第IV章 総括

### 1. 遺構の変遷と時期について

第3次調査では、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、材木廻跡、溝跡、土坑、柱穴などの遺構が発見されている。これらの遺構は出土した土器・須恵器などの特徴から、古墳時代中期から平安時代にかけて機能していたと考えられる。中でも建て替えが行われているSB01・02の大型掘立柱建物跡の発見は、今回の調査成果の上でも特筆されることである。ここでは、この大型掘立柱建物が造られた時期（II期）を中心として、発見された主要遺構群を重複関係から3期に大別して変遷をみていく。なお、個々の遺構の年代観については第3章を参照されたい。



第64図 第3次調査 主要遺構相関図

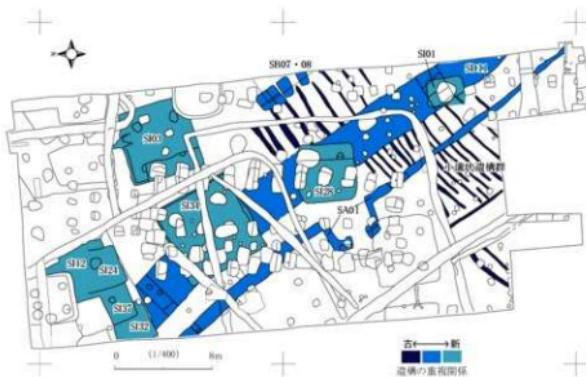
#### 【I期】

大型掘立柱建物跡であるSB01・02より古い時期の遺構を一括する。発見された主な遺構は調査区の北西から南東部へ走る大溝であるSD11と、その西側に存在するSA01、そしてSA01とほぼ同様の主軸方位をとるSB07、SI03・28・34などの竪穴建物跡、そして小溝状遺構群である。

SD11は断面などの観察から3回の作り替えがあったことが判断できる。このうち、最終段階のものは上幅3mで、確認面からの深さは55cmを測る。溝の内部には厚く砂層が堆積していることから、洪水などによって埋没したとみられる。

SA01はSD11の西脇から2m西側に存在し、真北から西へ約40度西に傾いた方向でつくられている。SA01は北から延びるものと、南側から延びるものと、調査区の中央付近でほぼ直角に西側へ2.5mほど屈曲しており、屈曲したそれぞれの先端には柱穴が存在していることから、冠木門のような施設が存在していた可能性がある。

I期の中では明確に新旧関係がみとめられるものがある。まず調査区の東部および南部付近で確認されている小溝状遺構群は、すべてSA01・SD11に切られている。遺構内からは南小泉式の土器が出土しており、小溝状遺構群は古墳時代中期に形成された可能性がある。また調査区中央付近で確認されたSI01・SI28・SI34の3軒の竪穴建物跡は、SD11が埋没した後につくられている。しかしながら、SD11とSA01は

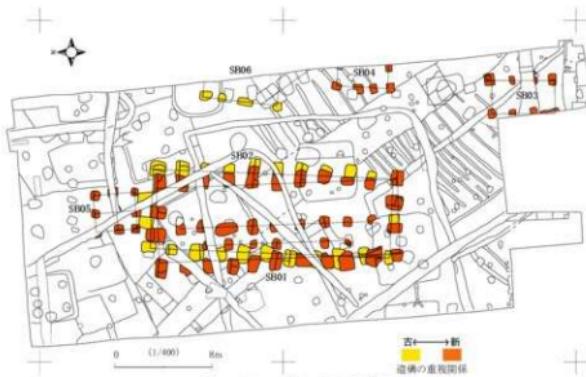


第65図 I期の主要遺構群

直接的に重複していないため、両者が併存していたのか、別個に機能していたのかは現時点では不明である。また SD11 と SA01 からは遺物がほとんど出土していないため、機能していた年代についても現段階では明確にはできない。このためⅠ期の時期については、古くは古墳時代中期以降であり、新しい段階は後述する SB01・02 の大型掘立柱建物跡より古い、SI34 から出土した遺物の年代観から 8 世紀初頭以前と考えられる。

【二期】

発見された SB01・02 をはじめとする、掘立柱建物群が形成された時期である。大型の掘立柱建物跡である SB01・02 は、ともに桁行 10 間（19.68～19.76 m）、梁間 3 間（6.12～6.50 m）を数える長大な建物である。この 2 棟の新旧関係は真北より東に約 2 度傾く SB02 が古く、西に 2 度傾く SB01 が新しいが、南東隅の柱穴を基準としてほぼ同位置で、同規模の建て替えを行っていることから、同じ機能を有した建物である可能性がある。なお、SB02 の柱穴では、ほぼすべての柱が抜き取られ、SB01 では部分的に柱の抜き取りが行われている。また SB02 では内部を区画する柱穴は見当たらないが、SB01 の内部西寄りでは南北方



第 66 図 II 期の主要遺構群

向にやや小型の柱穴列が2列認められており、間仕切りあるいは床束が存在していた可能性がある。このほかの掘立柱建物跡では、主軸の方向からSB04がSB02と、SB03・05がSB01と同時期に機能していた可能性が考えられる。

II期の時期については、SB02より古い遺構の中でI期最新のSI34が7世紀後半～8世紀初頭頃であり、III期のSB01より新しいSI27が8世紀末葉頃であることから、8世紀初頭～末葉と考えられる。

### 【III期】

竪穴建物跡群、溝跡、土坑で構成される。竪穴建物跡群は第1次調査の成果から、今回の調査区北側一帯で展開していると考えられる。調査では4軒の竪穴建物跡を調査しており、大型の掘立柱建物跡であるSB01より新しいSI27からは8世紀末葉頃、北側に位置するSI11からは9世紀後半頃の土師器・須恵器が発見されている。またSI11より古いSI22・23は堆積土中からの出土であるが9世紀中頃の土師器・須恵器が発見されている。

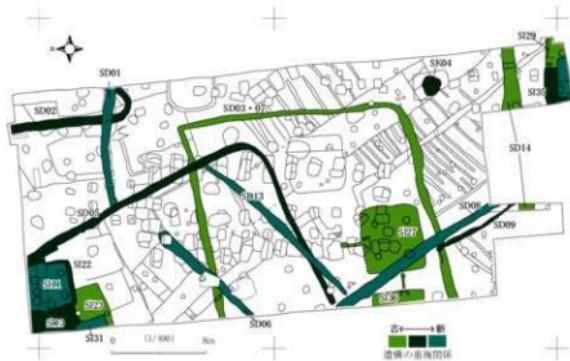


図 67 III期の主要遺構群

溝跡はSD11を除くすべてが重複関係からIII期に属するが、遺物の出土は極めて希薄であり、個々の遺構の年代観を明示するのは困難である。重複関係では最も古いSD02、03・07は、他の溝跡に比べると正方位に近い軸線である。このうちSD03・07は調査区内でコの字状を呈するものであり、内部にはほぼ同様の主軸を呈するSI27・36が存在することから、居住域内を区画するためにつくられた可能性がある。またSD14は部分的な検出であるため断定は難しいが、SD03・07の南辺と近似した主軸方位を示すことから両者は一連のものとして機能していた可能性がある。なお、SD03・07より新しいSD05も、南東部のコーナーが確認されていることから区画溝の可能性が考えられる。一方、今次調査で確認された遺構群の中で最も新しいSD06とSD13は、他の遺構とは大きく異なる主軸を有している。この両者の主軸はN=42°～43°-Eであり、溝の終点が揃っていることから同時に並行して機能していた可能性が考えられる。調査区の北東部では延長線が確認されていないため、遺構の詳細については今後の調査でさらなる検討を要するが、それぞれの溝の中心からの芯々距離は7.2mを測ることから道路側溝として機能していた可能性も考えられる。

III期の時期については、II期遺構のSB01より新しいSI27が8世紀末葉頃であり、第2次調査で確認されているSD01など複数の遺構で10世紀前半に降灰した灰白色火山灰を含むことから8世紀末葉～10世紀代と考えられる。

## 2. まとめ

ここでは今次調査の成果と、調査から浮かび上がった新たな課題を例挙して、まとめたい。

今次調査での最も大きな成果となったのは、II期遺構としたSB01・02という2棟の大型掘立柱建物跡の発見である。これらの建物は同様の規模（桁行10間・梁間3間）で、I期遺構群とは大きく異なり、正方位を強く意識して作られていることが判明した。宮城県域を俯瞰すると、仙台市郡山遺跡、東松島市赤井遺跡、大崎市名生館官衙遺跡など、いずれも律令国家が運営に関与した遺跡が7世紀末～8世紀初頭頃に成立しているが、これらの遺跡で確認された主要施設のいずれもが前段階とは大きく異なり、正方位を強く意識して運営されていることが大きな特徴となっている。今次調査で確認された大型掘立柱建物を中心とするII期遺構群が同様の傾向を示すことは、この地に律令国家が成立に関与した施設の存在する可能性を大きく補強するものとなった。なお、大型掘立柱建物の造り替えが行われたSB01では、西寄りの内部に柱穴列が存在する。この柱穴列は梁行の柱筋とほぼ同一ラインに相当するものの、柱穴の規模はいずれも側柱柱穴より小規模であるために棟持柱の柱穴とは考えにくく、現時点では床束、あるいは間仕切りの可能性を考えている。村田晃一氏からのご教示に拠れば、県内では類似例として多賀城市市川橋遺跡SB2330建物跡（多賀城市教育委員会：2004）があるが、今後さらに類例を調査し、建物の性格の解明に努めていただきたい。

I期遺構としたSA01とSD11は主軸方向がほぼ同様であり、直接的に切り合わないことから同一時期に機能していた、とみることもできる。しかしながら、両者と複合的な重複関係にある遺構も無いことから、現段階では確実に同一時期の機能と裏付ける根拠は無い。またI期遺構ではSB07・08の存在も課題となる。この掘立柱建物の主軸方向はSA01とSD11に近似しているが、こちらも時期を特定しうる遺物は出土していない。これらの遺構がはたして同一時期に機能していたのかは定かではないが、SA01・SD11とSB07・08が一連の施設として存在した場合、SA01の開口部の形状の類例として多賀城跡東門などを参考にすると西側が主体部と想定でき、SB07・08は主体部の外側に位置することになる。今次調査で確認されたI期遺構群のより詳細な機能時期、展開規模、そして遺構群全体の性格などの解明については、今後周辺で調査を実施する際に留意していただきたい。

III期遺構群の課題には8世紀末葉以降の掘立柱建物跡が調査区内では見られないことが挙げられる。周知のとおり玉前駅家は『延喜式』の記載にもあるように、少なくとも10世紀代までは機能していたと考えられ、玉前刻についても多賀城跡より出土した木簡が9世紀代とみられることから、その時期までは刻に関連する建物等の施設が存在していたと考えられる。原遺跡に玉前駅家・玉前刻が設置されたと想定すると、調査地点で9世紀以降の掘立柱建物が見られず、堅穴建物群が増加する傾向であることは、8世紀末葉の段階に区内で大規模な改変が行われていた可能性が考えられる。

原遺跡の調査成果は古代の岩沼の姿の一端を明らかにするだけにとどまらず、古代における交通網や物流の考証、設置施設の復元を考える上でも多くの情報を提示できる可能性がある。今後も継続的・計画的に調査を実施し、様々な課題の解明に取り組んでいただきたい。

## 【引用・参考文献】

- いわき市教育委員会 1981 『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第6冊
- 岩沼市教育委員会 2005 『鶴ヶ崎城跡・第4地点』岩沼市文化財調査報告書第6集
- 岩沼市教育委員会 2015 『熊野遺跡（第2次調査）の概要』『平成27年度宮城県遺跡調査成果発表会』  
発表要旨 宮城県考古学会
- 岩沼市教育委員会 2018 a 『原遺跡第2次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第19集
- 岩沼市教育委員会 2018 b 『下野郷館跡・五間堀川河川改修事業に伴う発掘調査報告書』  
岩沼市文化財調査報告書第20集
- 岩沼市教育委員会 2018 c 『岩沼市・原遺跡第3次調査の概要』『平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会』  
発表要旨 宮城県考古学会
- 岩沼市教育委員会 2019 『岩沼市・原遺跡第3次調査の概要』『第45回古代城柵官衙検討会』発表要旨
- 岩沼市史編纂委員会 2012 『子ども岩沼市史』
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史 第4巻 資料編I 考古』
- 岩沼市史編纂委員会 2018a 『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』
- 岩沼市史編纂委員会 2018b 『岩沼市史 第9巻 特別編I 自然編』
- 国士館大学考古学会編 2009 『古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相—』
- 藏王町教育委員会 2011 『十郎田遺跡1』藏王町文化財調査報告書第13集
- 佐藤敏幸 2003 「10. 赤井遺跡－古代牡鹿柵・牡鹿郡家－の概要」『第29回古代城柵官衙検討会』  
発表要旨
- 白鳥良一 2015 「特論 岩沼市内の東山道と玉前駅・刻（閔）」『岩沼市史』4・資料編I「考古」
- 仙台市教育委員会 1995 『南小泉遺跡 第25次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第196集
- 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編(1)』仙台市文化財調査報告書第283集
- 多賀城市教育委員会 2004 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III－』多賀城市  
文化財調査報告書第75集
- 高橋誠明 2003 「1. 名生館官衙遺跡の概要」『第29回古代城柵官衙検討会』発表要旨
- 東野治之 1994 『書の古代史』岩波書店
- 東北古代土器研究会 2008 『東北古代土器集成－須恵器・窯跡編（陸奥）－』
- 奈良文化財研究所編 2014 『長倉と官衙の建物配置 報告編』第17回古代官衙・集落研究会報告書
- 福島県教委 2017 『県道北泉小高線閏連遺跡発掘調査報告2－五畝田B遺跡』福島県文化財調査報告書  
第516集
- 藤澤 敦 1992 『引田式再論』『歴史』第79輯 東北史学会
- 宮城県教育委員会 1980 「3. 塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書  
第69集
- 村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」『古代官衙の終末をめぐる諸問題 第1分  
冊問題提起・各地方の概要』東日本埋蔵文化財研究会
- 村田晃一 2007 「V. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』  
東北学院大学文学部
- 亘理町教育委員会 2016 『国史跡 三十三間堂官衙遺跡・平安時代の陸奥国亘理郡衙跡発掘調査総括報告  
書』亘理町文化財調査報告書第19集





第3次調査全景

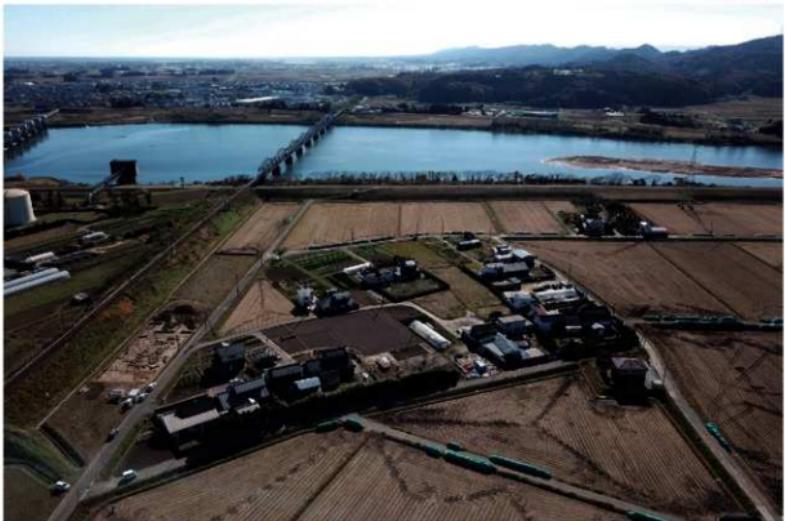
写真図版 2



遺跡上空から阿武隈川上流を望む（東から）



遺跡上空から千貫山を望む（南東から）



遺跡上空から阿武隈川と亘理郡を望む（北から）



遺跡上空から阿武隈川下流を望む（西から）

写真図版4



遺跡上空から岩沼市街地を望む（南西から）



阿武隈川南岸より原遺跡を望む（南西から）



第1～3次調査区全体（南から）



SD11 土層断面 北（南東から）

写真図版 6



SB01・02（北西から）



SB03（北から）



SB05 (北から)



SB01 P107 (東から)



SB01 P238 (南から)



SB03 P195 (東から)



SB05 P178 (東から)

写真図版 8



SI11（南から）



SI03（南から）



SI03 カマド遺物（第 10 図4）出土状況（南から）



SI27（南から）



SI27 カマド（南から）



SI29 カマド遺物（第 34 図1）出土状況（南から）



SI36（北西から）



SI36 カマド（西から）



1 SI01 土師器底（第8図1）



2 SI03 土師器縁（第10図2）



3 SI03 土師器手づくね土器（第10図3）



4 SI03 土師器蓋（第10図4）



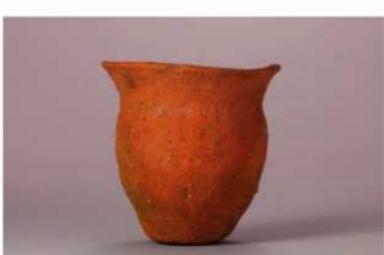
5 SI03 土師器蓋（第10図4）



6 SI03 土師器蓋（第10図5）



7 SI03 土師器蓋（第10図5）



8 SI03 土師器甕（第11図1）

写真図版 10



1 SI03 土師器壺（第 11 図2）



2 SI03 土師器壺（第 11 図4）



3 SI03 土師器壺（第 11 図5）



4 SI03 土師器壺（第 12 図1）



5 SI03 土師器壺（第 12 図2）



6 SI03 磨石（第 12 図3）



7 SI03 磨石（第 12 図3）



8 SI03 磨石（第 12 図3）



1 SI05 刀子（第 14 図1）



2 SI11 土師器環（第 16 図2）



3 SI11 土師器環（第 16 図3）



4 SI11 土師器環（第 16 図4）



5 SI11 土師器環（第 16 図5）



6 SI11 土師器環（第 16 図7）



7 SI11 土師器壺（第 16 図9）



8 SI11 土師器壺（第 16 図10）

写真図版 12



1 SI11 土師器甕（第 16 図 11）



2 SI11 土師器甕（第 16 図 12）



3 SI11 須恵器甕（第 17 図 1）



4 SI11 須恵器甕（第 17 図 2）



5 SI11 須恵器甕（第 17 図 3）



6 SI11 須恵器甕（第 17 図 4）



7 SI11 須恵器甕（第 17 図 5）



8 SI11 須恵器甕（第 17 図 6）



1 SII1 須恵器環（第 17 図7）



2 SII1 須恵器環（第 17 図8）



3 SII1 須恵器環（第 17 図9）



4 SII1 須恵器短頸壺（第 17 図 11）



5 SII1 須恵器長頸壺（第 17 図 12）



6 SII1 須恵器瓶類（第 17 図 13）



7 SII1 羽口（第 18 図1）



8 SII1 凹石・磨石（第 18 図2）

写真図版 14



1 SI11 鉄滓の付着した炉壁



2 SI11 鉄滓の付着した炉壁



3 SI22 須恵器壺 (第 21 図1)



4 SI23 土師器壺 (第 22 図1)



5 SI23 須恵器壺 (第 22 図3)



6 SI24 土師器壺 (第 23 図1)



7 SI27 土師器壺 (第 29 図1)



8 SI27 土師器鉢 (第 29 図2)



1 SI27 土師器壺（第 29 図5）



2 SI27 土師器壺（第 29 図6）



3 SI27 土師器壺把手（第 29 図7）



4 SI27 須恵器壺（第 29 図9）



5 SI27 須恵器壺（第 29 図 10）



6 SI27 須恵器壺（第 29 図 11）



7 SI27 須恵器壺（第 29 図 12）



8 SI27 須恵器（第 30 図1）

写真図版 16



1 SI27 須恵器壺（第 30 図2）



2 SI27 須恵器壺（第 30 図3）



3 SI28 土師器高壺（第 32 図1）



4 SI29 須恵器壺（第 34 図1）



5 SI29 支脚（第 34 図2）



6 SI30 須恵器壺（第 35 図1）



7 SI31 土師器壺（第 24 図1）



8 SI32 土師器鉢（第 25 図1）



1 SI34 土師器壺 (第 37 図2)



2 SI36 土師器壺 (第 39 図1)



3 SI36 壁土 1



4 SI36 壁土 1



5 SI36 壁土 2



6 SI36 壁土 2



7 SI37 土師器壺 (第 26 図3)



8 SI12 土師器壺 (第 40 図2)

写真図版 18





1 SK04 土師器鉢（第 59 図3）



2 その他 土師器坏（第 62 図1）



3 その他 土師器坏（第 62 図3）



4 その他 土師器坏（第 62 図4）



5 その他 土師器高坏（第 62 図6）



6 その他 土師器高坏（第 62 図8）



7 その他 須恵器坏（第 63 図1）



8 その他 須恵器坏（第 63 図2）

写真図版 20



1 その他 須恵器環（第 63 図3）



2 その他 須恵器躰（第 63 図7）



3 その他 弥生土器（第 63 図8）



4 その他 弥生土器（第 63 図9）



5 その他 弥生土器（第 63 図10）



6 その他 弥生土器（第 63 図11）

報告書抄録

岩沼市文化財調査報告書第 21 集

## 原遺跡第3次調査概要報告書

平成 31 年 3 月 29 日

発行岩沼市教育委員会

岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号

生涯学習課 TEL0223-23-1111 内線 573

印刷 株式会社 国井印刷

岩沼市藤浪一丁目4-35 TEL0223-22-2221